

白素齋

第參號



雜
33
93



言論

○自然と修養

藤井勝三

自然是修養の先導者である、苟くも「修養」なる言葉を用ふる以上、相當な修養眼が望ましいのである。——否これがない程ではまだまだ修養の本堂に到達せのものだらうと私は思ふ。——そこで此度は修養の方法に就いて愚見を説べて見やう。

赫々たる現代文明が、其源泉を西にしては、チグリスユーフラテスの藍青にやはらかい緑影を投げて悠々と白妙を敷くメソポタミヤの平原、に東に、して、千萬の神秘を包むが如き濁々たる大揚子江の流域に發してから幾千年、修養なるものは、ただそれが幼稚ではあれ、其當時已にわつた、その蒼黄たる幾千年の間修養そのものは時代の影響を受けないにしても、其の手段方法に到つては、大變遷が生じたのである、徳を修め氣を養ひ花に歌ひ月に詠じ、身は俗世間を超脱して獨り自ら高しとした古人の氣宇はよし欣慕すると云つても、其世と沒交渉なるに至つては學んで今人の法とするに足らない、一章の食一瓢の飲陋巷にわつて其樂を改めないのは當時の生活状態に於てのみ出来るのであつて、現今の生存競争の激烈な時代に於て果して出來得ることであらうか。抑修養には種々の手段がある、或は聖賢の教を遵奉し、或は大先輩の教導によるなきである、しかし我々は一步進んで社會に立つ時期を考へて見たい、繁雜な事務のす暇に凡股の方法で何れだけの修養が出來得るであらう、

此の急はしい修養、吾人が生れて墓穴に入るまで寸時も欲いでならぬ修養、なるべく其效果を大ならしめる様な方法を考へることが、今日我々人間の重大なる目前の仕事ではあるまいか、此に於て高唱するのである、自然を習へ、自然を學べど、巍々と雲際をつく清麗なる山の姿、萬頃の波を傾けて松籟を驚かす水の貌、一として修養の資とならぬものはない、ただこの自然の美を理眼を以て見たくない、情のあでやかな色彩を以てこれを前述の修養眼に映じたいのである、そこに自然是虚偽なく虚飾なく其本意を赤裸々に我々の前に露出するのである、風は樹頭を過ぎて颯々の聲を放ち、草は心無くして野邊に微笑み、思ひ無くして鳴く小田の蛙燐たる彼の月と日皆我等に不盡の趣味を養はすと同時に其の心を鍊磨するのである。

「風雅に於けるもの造化に從ひて四時を友とす見る處花にあらずと云ふこと無し、思ふ所月にあらずと云ふことなし、像花にわらざるときは夷狄にひとし、心花にあらざるときは鳥獸に類す夷狄を出で鳥獸を離れて造化にしたがひ造化にかへれとなり。」

と、彼の一帯の雅人、松尾芭蕉は云つて居る、「造化に從ひて四時を友とす。」とは思ふに彼の闊達たる胸中、正風の眼を開いた根底であらう。

釋迦は臘八の曉星を觀じて無上正等覺の悟と得、ニュートンは林檎の落つるを見て宇宙の大真理を發見した、我々があの貧富の差別なくして奏する萬物の麗しい音樂を聞き、美しい瑠璃窓を通して金殿の玉床にさし込む月の光も、葛の纏ふ茅屋の破窓を訪れる月の影も同一なるを見るときに至公至平の妙理を悟り得るのである、彼の山は高くして自ら高しとせず水は低くして自ら低しとせず、山は水を育くみて洋々たる流をなし、水ば山を圍繞しり全く數へ盡すことは出來ない。

大自然に抱擁せられる、我人は此の一大人格者に學んで初めて立派なる修養が出来るのである、蓋し人類を生みこれを抱擁するのは天地である、換言すれば人類の母は即ち天地である、子の感化は最も母親に負ふことが多いと同様に、人類は天地の感化を最も受け易いのである、事務に倦み疲れた身体を一室に横へて静かに聖賢の書を繙くもよからう、しかし私一少くとも私一人は此の寸暇を利用して杖を郊外に引くを望むのである明い緑の色芳しい花の香節面白い鳥の調、此等天然美は一面に吾人の疲勞を醫し、趣味を涵養しまた多面に完全なる修養の資を施すを思へば、最も理想的の修養法ではあるまいか、ただ注意すべきは再三説く所の修養眼のものである。

□向

上

木 原 秀 雄

「向上」とは我々が一日も忘れてはならないことであろう、向上の精神が無かつたなら死者と同じだ。

我が封建時代の大成功者徳川家康が人に訓へて曰ふやうには「我未だ志を得ざりし時常に二字の戒を守れり、即ち耐忍之なり、我將に志を得んとする時堅く四字の戒を守れり、即大膽不敵之なり、我の既に志を得るに及んで

又四字の戒を守れり、油斷大敵之也」と。彼は常に油斷大敵といふことが念頭に浮んでゐたのだ、一城一國と彼の領地が増す毎に向上の精神が益々燃えて行くに違ひなかつだらう。

己れの爲せし一小事に満足する者は進むべき限りに達したので、丁度谷間より出づる小川が大河にも流れず、大海にも沿がずに一小湖に停滞してしまつたやうなものだ。

我々は一生不平がなくてはならぬ、希望なきば死である、併し眞の向上とは何物かを得やうとするとか何人よりも出世しやうとするこではあるまい、現在の自己を一步一步高めやうとする事が向上であらうと思ふ。

□ 懲　牲

凡そ人類の諸道徳の中犠牲よりも美しい尊いものはあるまい、併し犠牲は地味なものである、他人の爲めには利益になつても自己に取つては何の利益にもなることでは無い、之は丁度心臓のやうなものである、心臓は四六時活動してゐるが手のやうに物を握り、足のやうに歩かない、又眼の如くに視、耳の如くに聽かない、即ち表面に其の功を現さないが間接に高貴なる功をなしてゐるのだ、心臓あつて初めて四肢諸官がその用を爲すのではないか、これと同じく犠牲者は自己に收める功はないが、社會に對して大なる努力をなして社會の調和を保つてゆくのである。

彼の明治の大維新も、犠牲的精神を以て、私利や私功に念なく、ただ國家の爲め、皇室の爲めに盡力した人が多かつたために成就したのである、併し此等の人々の中には直接に功を國家に對して爲さなかつたかも知れぬ、松

陰先生は維新前の大犠牲者であるといはれやう、先生には自己名利の念は全く持たれなかつた、徳富蘇峰は先生を評して「恰も難産したる母の如し、身死せりと雖も其の赤兒は成育し、長大となれり」と云つてゐる、成程先生は國家に對して直接に派手な功は無かつたかも知れない、が併し先生に師事した幾多の弟子が回天の事業をなしたではないか、犠牲者吉田松陰先生の血は無益には流れなかつたのだ、過ぐる日我學友矢田部嘉友君がこの美しい犠牲の行爲に出でた、そして前途望わる生命を失つてしまつた。

我々は此の生きた手本を見て如何に感ずるであらうか、君が高潔なる犠牲の行爲は我々を感動することは決して渺少では無い、その芳烈なる香氣は我々の精神に力づけずには己まない、方今世人は、皆自己を中心としてゐるのに君が自己を捨てて顧みないのは寸度沙漠中には清泉があるやうなものだ、犠牲的精神に餓へた我々の精神に無量の糧を送くつたのだ、君の血も亦無益には流れなかつたのだ。

然し從順は遂に軟弱なる弊に陥る基なり、如何なる言動あるも從順なるべしと云ふも断じて從ふべからず。

□ 現代青年の要求す

藤　村　五　郎

有爲の青年を毒して遂に空しく墓穴に入らしむるものは何ぞ、曰く、軟弱なる思想、柔弱ある習弊より大なるはなし、軟弱なる思想の存する所必ず衰へ、柔懦なる風の吹き荒々所必ず亡ぶ、然らば我國に此の風習ありや否や遺憾ながら之を認めざるを得ざるなり、現今尙老人の内には從順を以て最上の徳となすものあり、然其從順そのものは決して却くべき性質のものにあらず。

然し從順は遂に軟弱なる弊に陥る基なり、如何なる言動あるも從順なるべしと云ふも断じて從ふべからず。

之れ青年の意氣なり、生命の存する所なり、宜しく青年は四方に伸びざるべからず、吾人は盈栽的青年たるを欲せず、怒濤逆卷海邊に生ひ立つ松たらんことを欲す、徒らに外觀を飾ることのみによける婦女子的精神を大いに愧づるものなり、若し此の如き青年をして國家を組織せりとせんか、可憐其の國家たらんや、國運發展を計るべからずしてわたら遂に衰滅を免れず。

噫かくと思ひて両眼を開きて現今の青年の態度を見よ、彼等の内には娼婦にも劣るが如き、振舞を敢て爲し、恬然たるものあるに非ずや。

是もより青年の罪とは云へども又社會も、その罪の一半を背負はざるべからず、上流社會の人は畢竟て華美的奴隸となり、中下流の人も附和雷同して只身を飾るに汲々としてその害毒の實に深く且大なるかを知らざるもの

の如し、もしかくの如くして日を費し年を送らば我國は遂には滅亡せざるを得ず、何たる痛恨事ぞや。

現代の青年諸君よ、願はくばく自覺せよ、而して全力を擧げて奮ひ立てよ、眞に青年を導くは單に坐上の讀書ならず、將又說法ならず、常に接するの社會その物なり、故に吾人は切望す。

「激渉なる青年をして懦風を去らしめ思ふまま奮闘せしめよ」と。

□ 日本史と愛國心

福田幸雄

日本人は日本史を知らざる可からず、我が國体を知らんと欲する者、我が國史の第一頁を見よ、その古に於いて天照大神の瓊々杵尊に、與へ給ひし「豐葦原瑞穗國はわが子孫の君たるべき地なり、汝皇孫ゆいて治めよ、天つ

日嗣の榮にまさんこと天地と共に窮りなかるべし」の神勅、これ即ち萬世一系の皇室の基なりされば我が國、君臣の大義は歴史によりて定められたり、誰か自國を愛せざる者あらんや、其の國の歴史は、其國を愛する精神の源泉なり、我等の叫ぶ日本魂とは何ぞ、とは一言にして言はば、愛國心に外ならず、國を思ふと云ふ精神には無形の勇氣伴ふ、その勇氣が事ある毎に發揮しられ、有形の行爲となりて、國史にあらはれたり、見よ、古來よりの國難に際し當時の人士の如何に、燃ゆるが如き愛國心の存せしことを、古は神后皇后の三韓征伐より、元冠、近くは日清日露の役に、目覺しき活動せし源動力は何ぞ、そは愛國心にあらずして何ぞ、然らば愛國心は何に依つて養ふべきや、日本人には自ら日本を愛する心あるは、當然のことなれど、我が國史を読みて起ちし士幾許、自己の生命に代へ、自國を救はんとする崇高なる精神こそ神とあふがるなれ、楠公、菅公、其の他幾多の神社の祭主の命は僅か一代のみにて、盡くべきものにあらざりき、七生はおろか、百世、千世、今日迄否、青史の保存されん限り、其處に美名を残し、又神とあがめられん、古來神州の國には一種そこに不思議不可解なる、神の業あり、元冠に於ける伊勢の神風の如き、そを單に暴風雨と見るは、あまりに淺はがなる考なり、龜山上皇の御身を以て、國難に代へんとのかしこき、た祈りを何と見る、かくの如き尊き皇室の御陵威は、我が忠勇なる士を起たしむる、所以にして、又我が國の年々に隆盛にむむ原因なら、思ふに日本史は、我が愛國心と密接なる關係を有し、歴史は幾多の良材をつくる、古來英雄豪傑と呼ばれる士の、多く歴史に興味を有せしは、故なきことあらず、我が國は、地圖の上にては、決して大なる國にあらず、されど何故に列國の間に重きとなすや、素とより皇室の御陵威によるは無論なれど、日本人の心に横溢する日本魂、即ち愛國心に外ならざるなり。(大正

十一年八月二十五日稿)

回 嘘 矢田 部 嘉 友 君 會 友 山 本 勉 彌

→(8)←
大正十一年六月二十四日、一狂犬は越ヶ瀬より人畜を咬害しつゝ、萩町を通過し、三見村に到り、漸く茲に銃殺せらる、其間人を咬むこと十四名に達す、此狂猛なる狂犬堀内指月公園の外濠附近に到るや、學校よりの歸途にある、十歳なる吉屋某女に向ひ、顔面手足所と擇ばず、數多の咬創を與へ、そぞろに慘状を呈す、抵抗の武器と力とを有せざる幼女のことなれば、唯悲鳴をあげ、救助を叫ぶのみにして途上に倒れ、遠く望めば狂犬と一團となりて轉々し、將に悶絶せんとす、恰も一青年あり其附近を通過し、其救命悲痛の叫びをきけども、冷然として曰く「クソー誰が助けに行く者ぞ」と勿惶として逃ぐるが如く行き去る、眼鏡橋に於て此慘状を睹たる矢田部君は一青年の無慈悲なる行動とは天地霄壤の差あり、純真なる至情、止むに止まれぬ大和男心は、一身の危険など思ふ暇もなく、勇敢にステッキ手にし幕地に現状に駆けつけ、狂犬を劇打すること數回、狂へる犬は強敵ゴ参なれ此はかなはじと幼女を振り離し、逃ぐると見せたる一刹那、如何なる隙をや見出しけひ、矢田部君に飛び掛り、左手に二ヶ所の小咬創を與へて遁逃す、咬傷を受けたる両氏は迅速に醫師に就て應急の手當を受け、某女は即日豫防注射を開始したるも、俄に受傷者の多數を出したることなれば、萩地に於て十分なる、豫防薬を得ること難く輕傷なる、矢田部君は後廻はしとなり、其後種々なる行違ひの爲め、不幸にも十數日を経て漸く注射を受くるに到る。

七月二十七日吉屋某女狂水病を發し矢田部君も亦其徵あり、輕熱と左腕部に疼痛を覺ゆ二十八日午後余初めて診察するに、精神稍々不安沈鬱の状あり、咬傷瘢痕部の一端少しく腫張し、輕熱心悸亢進あり、二十九日來院の際腫張部を切開したるに、格別膿の貯溜を認めず、夕刻三十八度四分の熱あり、左腕の疼痛輕減したるも手指に振顫を認ひ、三十日熱三十九度、左手に運動麻痺あり、又時々四肢に小痙攣を來たし、自ら訴へされども嘔下困難の状あり、三十一日午前二時より急に粗暴状態となり、水は努めて飲めど悉く之を吐き、流涎甚しく、遂に吐血を來たし、四肢の麻痺起り、午前七時心臓麻痺を來たして急に他界す。

以上余は矢田部君が狂犬に咬傷せられた當時より死に到るまでの状況を略記したり、全君の犠牲的行動に就ては岩田校長始め有志の士は其美舉たるを激賞し、個人主義の惡風横溢する現代社會を改善するには、斯くの如き犠牲的精神の必要なるを高唱し、彼の小野訓導の溺死は教員と云ふ天職に對する責任觀念を伴ふ忘我的行動なるも全君の場合は唯相互に親和扶助すべき人類同志なりと云ふ崇高なる責任觀念ある他何等職業的責任あらざるに於て更に推舉に價するものなるを力説せらる、余は今人を救はんとして自らも遂に斃れたりとの單なる事實のみに據らす、全君が病中の覺悟及其最後の態度より得たる深甚なる感激の情を諸君の前に披瀝せんとす、君が咬傷を受くる約二ヶ月前山口縣の秋重衛生技手は學校に來り狂犬病に關する談話となし、狂犬病の恐るべき症狀を始めとし、咬傷を受けたる際の注意、十八日に涉る豫防注射の必要なること、一度發病すれば不治なること等を生徒に知らしひ、依つて君は勿論君の家人も其要点は畧之を知悉したり、の君發病徵あるや心中の苦惱察するに余りわれども、君が家人の恐怖驚愕更に甚しきものあり、至孝なる君は両親の憂鬱を輕減せんとし、其特有の症候を

→(9)←

現さざらんことに努め、此制抑の大努力は實際に於て憂鬱時には憂鬱の状を減じ、燥暴期に於ても其度を輕うし又特殊の症候少しく現はるも其徵ならずと辨明す、例へは嘔下困難起るも、此は故意にかかる水の飲み様をするなりと號し、手足に痙攣を起すも此は柔道の眞似をなす、なりと稱す、眞に病勢の進現に任かしたるは最後の四、五時間に過ぎず、一般病者が己が苦痛を針小棒大に訴へ、自らも過重に懊惱する者比々皆然り、病状を輕減し得る、意思の強固、精神力の旺盛君が如きに於て始めて之を見る、其最後の状たるや從容として死を恐れず、懸るに家人に暇乞となし、醫師も今來る可ければ床邊のとり亂しなき様、吐物等の汚物は片付け置かるべしと、細心ある注意をなし、少しも平生の心を失はず、否々平生より養ひ來りたる心の珠玉は益々光輝を發し、徐々に念佛を唱へ、恰も傑士大哲人が眠るが如く逝きたるなり、余は諸君と共に常に松陰先生及び其門下生の如く、死生の間に處して從容だる態度を持せんことを希ふ、而も眞に死生の間に出入する機會に接せず、果して自ら其希ふ所を遂行し得るやを危ふむ、今君の最後を見るに誠に羨望に堪へず、是平生より膽力を練り、君等が校是として尊む松陰先生の大精靈を得するに非ずんば孰んど茲に到るを得ん、君が平生の修養よりすれば彼の山櫻と咲き匂ふ大和男子が尊き犠牲的行動は誠に當然の歸着に過ぎざるあり、君の行動と反し君子は危きに近かよらずと許り逃れ去りたる無慈悲なる青年を考察するに、彼は安佚を欲し、私利私慾を逞しうし、卓屈なる現代人心を表現する社會相の一象徴として天より送られたる者と觀するに於て寧ろ微笑を禁せざるを得ず、彼が受けたる社會教育の惡果は、斯の如き耻づべき行爲を敢てせしむるに到る、今にして君が靈的淨化に浴し以て感奮するに非ずんば遂に凡庸の人たるを免れざるべし。

先般松陰先生誕生地の碑成り盛大なる建碑式行はる、其善事たるに於て衷心喜びに堪へず、然れども先生を崇信し、矢田部君の行爲に感謝の念を拂ふ地方多くの人士が或は己が安佚を欲し、危地に臨むを厭ふの士に非ざるやとの疑懼の念は些か余が心を暗うせしむ、願はくは先生の靈よ、願はくは萩地を護らせ給へ、萩地の人をして眞に覺醒せしめ給へと心に禱らざるを得ざるなり。

一不祥事の爲め洋々たる將來を有する君が前途を絶ちたるは遺憾此上なしと雖も、松陰先生の牢死を甚しき不運と觀せざる余は死して尙多くの教育資料となる君の如きも徒らに不運の人と云ふを欲せざるなり、君が高潔なる事蹟を知る人は必ず君が偉大なる精神に感奮し、同志の者は續々として生すべく、君が國家に貢献せんとせし精神は是等同志によりて必ず繼紹せらるべし、君よ幸に安かれ。

□歐米諸國の國民理想と我國民理想 石川修三

彼の獨逸帝國の理想とせし所は主として、權力主義、侵略主義、帝國主義、軍國主義であつた、佛蘭西は如何といふに、自由主義、平等主義、同胞主義である、米國は、自由主義、民主主義、人道主義、平和主義を標榜してゐる、英國は自由主義、文明主義、個人主義、人道主義の國と稱せられてゐる。

然して以上は勿論其大要を捕捉していくのであるが、我國の理想は那邊にあるかといふに淺學余の如きものには漠然とかゝるものであらうと憶測するに過ぎないが、彼の日清日露近くは日獨戰役に於て以前の國民理想は満足せられたが其後の新理想は何であるかといふにそゝ一朝にして變すべき性質のものとも思はれぬ、我等は日本

の今日及今後の事を考へるのにも決して歴史を忘れてはならぬ、歴史は決して過去のものでなくて、國民活動の記録である、脊後に載せられた歴史は死せるものであらうが、國民の精神生活の記録としての歴史は活ける國民活動の精神的產物である。

唯考慮すべきことは徒に過去の光輝ある歴史に一種の憧憬をもちて来るべき新時代の歴史の血脉中に過去の歴史の中に横溢してゐた活力素を入れようとせずして、これを誇りやかにいふ傾向これである、然し又將來ばかりを云爲して過去の歴史を顧みようとせぬのも不可である、即ち我等はこの意味ある歴史と顧みずて木に竹をつぐが如き所作は出來ないのである、勿論歴史を過去の事とのみ限るのはよろしくない、歩々歴史そのものたることを知つて、缺點を補ひ、必要である要素があつたならば、これを同化して新しきものを加へて、國民精神の精華である指導的理想を樹立しなくてはならぬ。

然らば我國は如何なる理想を歴史中に含んでゐるかといふに他國に於けるが如きものと相違してゐるようと思ふ即ち我國のは、

- 1、國家主義をとつてゐる。
- 2、王道主義である、故に或意味に於て人道主義でなくてはならぬ、王道は仁道であるからである、この點に於て英米兩國の理想と一致点を見出すのである、(1)、(2)、を一にして恩師吉田靜致博士は國家的人道主義といはれてゐる。
- 3、民本主義である、人民を以て本となすといふ一方面を語つてゐるものであらう現今流行語なるデモクラシ

一なる語には、兩義があつて其狹義に於ては民政主義であつてこれは人民以外には主権者がないとするものである、ここにいふ民本主義とはこの方ではなくて廣義のもので王道と一致する所のものである。

4、精神主義

以上の理想を我國の理想と見ることが出来る、我等はこの特色ある理想に應じて眞に理想の爲めに活動するといふことが必要である、吉田博士の言をかりていふならば我國の如きは同心一體といふ理想を最もよく表現し、尊嚴なる國体をもつてゐる所の組織上極めて理想的なる國体といふことが出来るのである。

我等はこの國民理想を楯にして邁進しなければならぬ、國家の隆盛を致すのは、恰度其時に發展すべき國民精神即國民理想が其内容を實現する時である、國家の新發展には新勢力を要するや切である我等青年又想ひをここに潜りて崇高なるこの國民理想の實現に力を致さねばならぬ。

所思と書す

安藤紀一

霜に色づく護國山の林薄を背景として、松本村の秋氣澄み渡れる十一月廿一日、余は、偶然にも、吉田松陰先生の實家杉氏舊宅の表座敷に坐せり、今日は、松陰神社の例祭にして、實に先生殉難の日に當れば、往時を偲びて參詣したるに、社壇の前にて、自警會の山本君より、先生の七生說の大意の説明と、今日の會合席上に爲さむことを囁せられ、さては、ろの會場なる此座敷に來れるなり、やがて、一同坐定る、見渡せば、會員は皆萩中學生なり、先づ、山本君の開會の詞あり、次に、余は、七生說を朗讀して、之を説話す、次に會員一齊に、「心の力」

第一章を朗讀す、次に、會員の輪讀あり、先生の遺文、及び、先生を批判したる文を讀めり、徳富氏の著なるべし、次に山本君は、先生の安政五年十月六日父兄に訣るる書を朗讀せらる、余は、此時辭し去れり、庭に下り立つ頃、「心の力」第二章の朗讀始るを聞けり。

教育修養は、各個人を主體として、外界の種種の方面より指導練磨して成るものなり、故に學校の師友は更にもいはず、校門外種種の場合に接する人によつても、指導せらるべきものたり、この自警會の如きも、其意味に於て確に教養の一機關なれば、學校諸生の自發的に此に一顧するは、決して閑事に非ざるのみならず、若し、先哲偉人に深き關係ある地に會し、其傍の偲ばるる建設物の中に身を置かば、修養上、何物をぶ捉へ得て、之に加ふるに、朗讀説話を以てせば、靈氣の體得、罷むに罷まぬ所、却て、彼の大廈高甍の校舎に勝るものあるべし、之によりて、余は今自警會の爲に、二條の愚見を呈す、其一は、殊更に會員を多く作らむことを務めざることなり其二は、成るべく權威ある讀物を用ゐることなり、會員を多く作らむと務めたる會には、不本意不熱心の會員を混有するものなり、かかる會は、甚不健全なり、その混有物を淘汰し、自發的に修養せむとするものののみとなる時は、少數なりとも健全なるべし、松陰先生の詩に、松下雖三陋村、誓爲ニ神國幹とあるも、全く、この少數健全の力を認められたるなり、又、權威ある讀物とは、先哲偉人の手に成れるものといふ、何如に、佳句麗詞なりとも、其作者の人格が衆に秀でざれば、會の指導者も中心より之を尊崇せし、指導者にして尊崇せざれば、被指導者の感應強からざるべし、故に、古來修養の課書は、師長自ら之作らず、必ず古聖賢の訓言を用ゐるを常例とす、この二條、もし始より、自警會の主義ならば、余また何をか言はむや、聊記して所感を附す。

■飛んで火に入る夏の蟲

岩田博藏

先般防長教育會の委託により伊藤徹成先生河野通毅先生は遠く京坂地方に在る幾多の中學校を視察せられた、而して先生方は異口同音に其豫期と反した事實は都會の學生が生意氣で横着で輕薄だらつとの考が全然裏切られた事であるといはれてゐる、即ち彼等は極めて眞面目で着實で眞剣に人の世話にならず自ら進んで己の本務を孜々營々努めつゝあるといふのである。

一体田舎に尊むべき所は質實にして表裏なき胡魔化さざる眞剣味である、生馬の眼を抜くといふ油斷のならぬのが都市の一般であるといふのも楯の一面の眞理であるが、又一面に於ては優勝劣敗の活きた事實を見せつけられ如何ある者が劣敗し如何なる者が優勝を占ひるかを實際面の當り視ては眞剣に蓄めずにはゐられないから如此目醒めたのに相違ない。

現代社會の苦しき實生活に入込む前に既に生存競争のマサカ闘争へば首が飛ぶといふ入學競争の難關を突破しなければならない今日の學生は何人といふても自覺せずにはゐられないではないか、吾々自警會員は名詫自稱の通り余儀なくせられざる前に自ら警め自らの覺醒により己の向上を期すべく努むべき筈だと思ふ

夏の夜の螢火には蟻を初め種々の昆蟲が其周圍に集つて來る、而して多くは命を捨てる今は電氣燈になつたから彼等には危險の度は少なくなつたが蠟燭や燈心時代には實以て死屍累々悲慘極まるにも拘らずドシ／＼此に近付き來るとは何たる因刲な事であろう、佛教では前生の業因といふて前生よりて美しき欲念に溺れた者が今生で飛んで火に入り燒死する夏の蟲は生れ換つたのだと說いて人間の思想を善導せんとしてゐる、是も面白い教訓的考

へ方である

乍然生物の進化的見地から觀れば虫が飛んで火に入るには虫の本能に左右せらるる、結果である地史の中世近古の地質變化の時昆虫と顯花植物とは互に助け合ふ様になつた、花粉を飛ばさねばならぬ虫媒花は其蜜によつて虫を養ふ、其花の色は色々あらうが虫の目につく様に出來てゐる、花は色により虫を誘ひ蜜を與へて己の結實繁殖作用を圖るのである、如此にして長き年月の間に白き美しき花の色に魅せられつゝあつた昆虫の習性は遺傳し來つて遂に其本能となり、何でもかでも其質を擇ばずして白き美しきものには飛び付き来る事となつた譯である、然るに世界は幾變遷をなし人類といふ高等動物が生れ出で時經て自分で火を發明し種々の利用原生の動力をなすに至つた、火は古代人が文明を生み出す有力なる原動力となつた、乍併火の發明は何萬年以來の事で昆虫が花を探し求めるといふ何十萬年の遺傳に比較して見れば地球上近頃の出來事である

憐れる昆虫は人間が火を發明しても一向之を識別せず此白く美しく輝く火の色を見て以前の通り蜜があるものと誤解して否本能の命のまにまに飛び來り全然其間に起りたる重大なる變化に思ひ至らぬからこそ自己の命迄も奪はれて仕舞ふ事になるのである、今や人間界は電燈に移つたから少しは虫に仕合すだらうが蜜丈は此所に得られぬ徒勞である、要は虫類が時世の變化進展に盲目にして覺醒しない所の災難である

果して然らば吾人亦常に時世の推移を考察し其本能をも矯正し不絶覺醒に覺醒を重ねて以て大勢に順應したる適當なる賢明なる態度に斷固なく改め行かねばならぬ、彼の飛んで火に入る夏の虫の如く破滅に陥つて仕舞つて泣く事も出來ない劣敗者に終らねばならぬのは如何にも愚の至で取返しのつかぬ愚鈍の骨頂である、既に都會學生

の實況を聞知し黙する能はざるものあり此一文を草し諸友に訴ふるものである。

思潮

木原秀雄

「浮世は夢」といふ語があるが之は慥に一種の眞理を云つてゐるものであると思ふ。而してこの諺には二通りの意味の解釋が出来る、一つは浮世は夢であるからしてつまう眞面目に暮すのは無駄である、即浮世は嘲笑して過すべきものであるといふ意と、他の一つは浮世は夢である自分の心の中の姿に過ぎないから必ずしも喜怒哀樂によつて、深く心を動かす必要はない、そんな悲しいことがあつても、どんな苦しいことがあつても、夢が覺めると無くなることであるからさほど悲ひに及ばないといふ意の二つあると思ふ、此の二つの意味は一寸似通つてゐるが、第一の意味をよく考へて見ると此の世を嘲弄して暮すといふのは頭から馬鹿にして懸る、即自分の爲すべきことを爲しないで、自分の力の及ばない時自分の運命に服従をしないで反抗するといふことになる。

第二の意を考へて見ると、諦めるといふのは、自分の爲

すべきことはなし、然も自分の力の及ばざる所に對して服従するのである。

反抗と、服従そこに、前者は一見豪傑風に見れるが、生は自分の無能なることを隠さんとする卑怯なる方法と云はねばならぬし、後者は自分の力の及ばないのであるから、ろの及ばない事を承認する、それを徒らに隠蔽しやうとしない、むしろ男らしい事だ、例へば二人の學生がゐと、全然嘲弄して、更に努力をしやうとしない、他の一人は自分の努力の限りを盡してみたが成績が悪いが此の世は夢であるから餘りに悲觀すまい、諦めやうと觀念する。此の二人の學生の中何れを是とし非とすべきであるか、我々は此の諺に於ては第二の意味即夢であるから忍び得る時は忍ぶといふ風に意味を取らねばならぬ。一人は自分の努力の限りを盡してみたが成績が悪いが此の世は夢であるから餘りに悲觀すまい、諦めは一秒が諦めるといふことにも程度があるので餘り早く物事を諦めてすべての物の進行を止めてはならぬ、諦めは一時の諦めで、更に一步進んで努力しなければならぬ。私は我々の現在見て居る現象界の總ての物は長い——夢の中の事物で、他に夢でない實際の世界があるかも知れないやうな氣がする、之はただ想像だけで果たしてこの

夢が醒める事とか、夢で無い世がある事とかは全然分らないが、兎に角此世を夢とするならば、出来るだけ樂しく美しく見たいものである、所謂寢覺めをよくしたいものである、夢は自分の心の持ちやうで樂しい夢も美しい夢も見られる、人生の夢も或程度迄自分の思ふ儘に支配することが出来る、云ひ換ふれば人の運命は自己の力で支配することが出来る事になる、此の世の眞の成功者は自己の力で美しい樂しい夢を見る人である、即或程度迄運命を支配する力を有する人だと思ふ。

此の世は夢だ、邯鄲夢の枕の故事もある、勉めて樂しい夢を見やう、此の世は苦しい、併し夢だ悲觀すまい。

不思議の力

五鳥居勝

大は宿星より小は塵埃に至るまで上は王公より下は小僧に至るまで皆一つの不思議の力に支配されてゐる。余は人の力を無視するものではない、然し此の不思議の力を考へ来る時は人の力の如何にも貪弱なるに驚かざるを得ない、金殿玉樓に住ひ虎皮に坐し我こそ貴顯でござると威張つてゐる人が何日何時此の不思議の力に唯一の生命を奪はれるやを知らず、身を捨て國を救ふたと云ふ

英雄たちも其間常に此の不思議の力に祐けられたり妨げられたりした事を認めざるを得ない、彼のウエルダンの落ちなかつたのは佛軍が善く防いだ結果とは云へ若し十日間に彼の大風雪が起らなかつたならば勝利は或は獨軍に歸したに相違ない、是れ果して誰の力ぞ、然り。こんな事を考へる事は愚な事だ、人は只爲すべきを爲すのみだ、松陰先生は至誠を以つて國に盡された、而して何故天は此の至誠に對しも少し早く響鳴して呉れなかつたらう、天に冲する壯士の意氣、血の出る様な努力、之に對する時の報酬は何か、憾む可し断頭台上の人となられた御苦勞で御座る」と叮嚀に挨拶されたと云ふ事だ、こゝでは、而して先生の胸中如何、先生斬首の際吏に向つて可きた

然れども吾人果して此の覺悟に徹底してゐるかどうか、世人は此の世の中は何でも智慧と力でやつて行けるもの如く考へ少しもこの不思議の力の如何を究むる事を知らず、之に祐けられて謝する事を知らず、之に妨げられても省みる事を知らず、空しく喜び徒らに泣き睡生夢死に此の日此の日を送つてゐる様である。

回 神秘なる星

山本

斌

星よ！汝は輝いて居るのか何時迄輝くのだ、星よ！ナポレオンも汝を見て萬事休すと嘗ては嘆息した事もあつたのだ、シーザーが死する前に慧星が走つたと云ふ、それは汝が走つたのでは無いか、又くりかねすがナポレオンが歐州を蹂躪して微笑を洩して汝を眺めた事もある、一敗地にまみれて孤島コルシカの蒼空に輝く汝を見つゝ彼も死の運命に陥つたのだ、シテ見るご汝はナポレオンの友か！、シーザーの友か！、否々ナポレオンは嘗て云つたのだ、「妻よ御身は余に一通の手紙も呉れざるか、御身は我が慰安となさざるか、最愛なる妻は天上に走るか」とナポレオンの熱情は君に走つたのだ、シテ見るご汝はナポレオンの最愛の妻であつたのか！否シーザーの妻であつたのだ、歴史は變遷して行く、人も又落つ、星よ！

人類の歴史を空より見て笑つて居るのか、僕にはそれがわからぬのだ、不可解だ。労働青年は野より歸りに「ああ星よれ前は何が悲しくて瞳をしばたゝいて居るのか下界に居る我等に何を教へて居るのか、俺はお前が一番すきなのだ、一日の仕事につかれて歸る道お前は必ず迎へてくれるのだ——星よお前は美しく輝いて居るが俺は

一日——一時としても萬人の前に輝く事は出来ぬのだ、俺はお前の如く輝きたい」嗚呼、人生は悲哀なのか、星は萬物を照し敢へ見逃さない、我等の一動作も星は見つめて居るのだ、晝も夜も、悲哀を感じて歸る時星も輝いて瞳をしばたゝいて慰めて呉れる、勝ち誇りて歸る時星よ汝は我等を歓迎して呉れる、その時の嬉しさ、その裏面には何ぞ哀れなると自ら嘆息して居る人が居るのだ。それがわからない、人が死する時、人が天上の樂園に登る時汝は落ちると云ふ、世界は過去幾億人死んだたらうか、幾つ星が流れたらうか、その神秘さ、星よ汝は神秘だぞ、（終）

回 勤勉

藤村五郎

「業は勤むるに精しく、嬉しむに荒む」と、性質遲鈍なる者にても勤めて止まざれば遂には成功し、頗敏なるものも遊惰なれば何事をか成し得べき。龜と兎の譬はよく此間の消息を語る、古語に曰く、「人一度して之を能くすれば己は百度し人十度して能く之とあさば己は千度す」と、果して此の法則を能く守らば愚は明に弱は強となり

回 友へ

宮内謙吉

れ

正大ならず、目前の誘惑に打ち勝ち勞苦に抵抗するの力鍊したるに及ばざること遠し、彼の英雄織田信長は「嗜の武邊は生れながらの武邊に勝れり」と云へり、才ありとも恃ひに足らず、才あくとも悲しひ勿れ、

只成業の道は勤勉あるのみ、頼山陽は「吾を天才と稱するは吾を知らざるなり刻苦勉勵すと云ふ人こそ吾を知れり」と云へり、實に學生は勿論青年少壯如何なる業務にたずさはる人も此の言の葉を含味すべきなり、

しかし成功將又不成功は運不運によることあれ共運は外より来るものにして我が力の及ぶ所ならず、我は只自己の全力をつくして勤勉するあるのみ、且運命を如何ともしがたきと思はるれど其の實運に非ず只百折千挫は屈せず撓まぬ努力の結果成業のなることなきに非す、これこそ自己より運を開拓して行くと云ふべきなり、

僕伴を望むは甚た賤しむべきことなり、射伴の心一度起る時は勤勉の氣力頓に衰へ遂には卑劣なる手段を講ずるに至るべし、其の上僕伴によりて一時志を得ることありとも其の成功は堅實ならず、論語に云はずや「飯疎食飲水曲肱而枕之樂亦在其中」、不義而富且貴於我如浮雲と、實に然り、浮雲の如く果は見惜き失策を招くものなり、すべて遊情にふけり僕伴を希望する者は志願

正大ならず、目前の誘惑に打ち勝ち勞苦に抵抗するの力備に忙しい様でした、實業學校でないだけ、會社や銀行の話は聞かれなかつた位でした、教科書と参考書は天地を盡したものでした。三月中旬から四月に渡つて、もし日本全國を瞰下する事が出來たなら、如何なる名畫工と兄、お互に敗戦の將となりました、私のは人が熱心に準備中、あまり呑氣を氣取つたのですから將でなくて敗軍に接しました、卒業してから八ヶ月、事に遇ひ物に觸れ、殘念でならぬのは在學中の心掛けです、學校の秀才必ずしも社會の秀才でないと云ふのは、教科書萬能主義にたゞねを理由として怠つた者が、意外に實社會に直接役

振つてゐるのは、書物に囚れず、不知不識の間に日常の出来事に相當の意見をたててゐたからでせう、女學生が嫁入つて料理をするのに筆記帳を持つと同じ惡口をさくのは却つて成績表を氣にしてゐた故でせう、試験萬能とも云はれやう現代に、人間らしい氣分の養はれる時機は青年から奪はれた形です、体の出來るのは二十才位迄でせう、智識の基礎もそれ迄には出來てゐなくてはなりません、短哉人間の生涯、私は思ふ、二十才迄に蓄へたものをそれからは消費する一方だと、してみればどうですか小學校の時代が唯一の樂しみな時です、試験試験どうしでも呪はずには居れぬではありますか、ああ父たり師たる人は子弟の爲に餘程考へて貰ひたくなる、僅か六年H兄、最近の御手紙に萩原新生氏の事が書いてありましたね、私は校友會雑誌を調べて見ました、大正七年の卒業ではありませんか、あまり新しいので驚きました、軍人で名を得た者が多くある筈の萩中に兼常清佐氏や萩原氏の如き藝術家が出られた事は奇異の感がしますが、萩では田中大將や、鐵道大臣は大歓迎をします、併し世界的に有名な兼常氏を知らぬ人が多い、萩中に在る間私は軍人の講演を度聞かれた爲、萩中は軍人の多く出

出逢つてゐます、心では如何様にも思へますが、實際になると一步も動けないのが殘念です、君が悲觀はせぬが閉口すると云はれたのも察せられます、卒業前後の怪氣焰も反比例して今の閑々となつた、懐焉たるもの、はがゆいもの、小さい腦隨に全宇宙が溢れて、どうとも處理がつかぬ。とりとめもないことを書きましたが、此度はこれでお別れとしませう。

(此ハ大正十一年七月十九日山本醫院ニ於テ本會例會チ開キタル際老儒原田先生會員ノ爲メ特ニ講述セラレタルモノナリ)

君子素^ノ其位^一而行^フ不^レ願^ミ予^ク其外^一（第一節）

素^ノ富貴行^フ乎富貴^ニ素^ノ貧賤^ニ行^フ乎貧賤^ニ素^ノ夷狄^ニ行^フ乎夷狄^ニ患難^ニ行^フ乎患難^ニ君子無^ミ入^ル而不^ニ自得^ヤ焉（第二節）

講義

第一節及第二節講義概要

原田貞男

（此ハ大正十一年七月十九日山本醫院ニ於テ本會例會チ開キタル際老儒原田先生會員ノ爲メ特ニ講述セラレタルモノナリ）

君子素^ノ其位^一而行^フ不^レ願^ミ予^ク其外^一（第一節）

素^ノ富貴行^フ乎富貴^ニ素^ノ貧賤^ニ行^フ乎貧賤^ニ素^ノ夷狄^ニ行^フ乎夷狄^ニ患難^ニ行^フ乎患難^ニ君子無^ミ入^ル而不^ニ自得^ヤ焉（第二節）

君。子。此ノ君子ト云フ事へ人ヲ尊稱シタ辭ニシテ、同ジ君子ト云フヲモ場合ニ依テ異ナル事ガアリマス、即チ諸侯卿大夫等ヲ位ノ貴キ故、君子ト申スコトガアリマス、又學問モアリ、德行モアリ、學德兼子備フル人格ノ人即チ世ニ聖人賢者ト云ハルル人物ナ君子ト申スコトガアリマス、而シテ茲ノ君子ハ位ノ貴キ諸侯ヤ大名ノ如キモノデハアリマセヌ、全ク學德兼備ノ賢人トモ云フ可キ人格アル人ナ指シテ申シタノデアリマス。素^ノ其位^ニ而行^フ其ト申スハ物ナ指シテ云フ辭デ、茲ノ其ハ上ノ君子ヲ指シタルモノナリ、位ト申スハ爵位ノ事デナク、其君子タル人ノ現在ノ立場若クハ境遇ナ云フタモノデス、素シテトアル素ノ字ハ絹ノ極メテ精白ニシテ何等ノ飾リ彩色等ノナキモノナ云フ、故ニ論語ニ繪ノ事ハ素ヨリ後ニストアル、物ノ素質即チキソト云フ意ナリ、故ニ君子ハ今日現在ノ境遇ヲ素質シテ之レニ居リテト云フ義デアリマス、行フトハ中庸ノ道ヲ行フベシト云フ義ナリ。

不^レ願^ミ乎其外^一其トハ君子ノ現在ノ位置境遇ナ指シタルモノ。外トハ自己ノ位置境遇以外ナ云フノデ、吾上位ニ在レバ下へ外ナリ、吾下位ニ在レバ上へ即チ外ナリソコデ身上位ニ在リテ下ヲ凌ギ、身下位ニ在リテ上ヲ

る中學の様に思ひましたがさうではなかつたのでした、先夜も友人が會して談偶々攝政宮殿^下の舞渡歐富時に及びました、その時思ひました畏くも殿下と私等は餘り年齢が隔つてゐない、新聞紙が傳へる殿下の御動靜は私等の關係は如何、思想問題、體質問題、等で私等は一等國の如く、まだ君には忠をし國を愛せよと、聞かされたばかりでは駄目だ國家と我等との如何に密接なるものであるかもつと深く徹底させて貰ひたい、政治は政治屋にはならない、果然として居てはならない、帝國と列國との關係は如何、思想問題、體質問題、等で私等は一等國の如く、まだいつもの不得要領に終つた様ですがとにかく人生の一一番膨脹出来る時期に、悲觀だの生死だのと考へかせきりでは封建の時代と些の變りはない。

H兄、またいつも不得要領に終つた様ですがとにかく人生の一一番膨脹出来る時期に、悲觀だの生死だのと考へ込むのはつまらない事です、因はれずに愉快な日を送る様にしなければ駄目だと思います。

そうは云ふものの、お互に解き難い、放れられぬ問題に

援クカ如キハ皆其外ヲ願フノデアリマス、故ニ自己ノ
境遇ヨリスレバ、他人ノ境遇ハ皆外デアリマス、願ト
ハ欲思也、羨望也ノ意ヨシテ不レ願ニ其外一ト申シマスレ
バ、吾上位ニ在レバ下ヲ凌ガズ吾下位ニ在レバ上ナ援
ケズ、吾貧賤ノ境遇ニ在レバ徒ニ他人ノ富貴ナ慕ヒ或
ハ羨マザルガ如キガ凡テ其外ナ願ハサルノ義デアリマ
ス。

此一節ヲ約メテ申スナラ。君子ト尊稱セバハ、吾身現在ノ境
徳兼備ノ崇高ナル人格ヲ有スル人物ハ、吾身現在ノ境
遇ニ處シ泰然トシテ之ニ安ンツ、徒ニ他人ノ境遇ヲ慕
フタリ羨メダリスルモノデナク、只己ヲ正フシテ人ニ
モ世ニモ求ムル事ナク、終ニ上ミ天ヲ怨ミズ、下モ人
ナ尤メズト云フ平清ノ境ヲ保チ得ベキモノ也ト云フ義
デアリマス。

○素一富貴一行二乎富貴一富トハ備也厚也豊ニ於財也ニシテ
俗言ノ金持デアリマス、貴トハ高也尊也又易ノ繫辭ニ
ハ崇高莫レ大ナルハ乎富貴一ヨリトアリマスレバ、人ノ官位勳
爵ノ高キヲ貴ト申シマス、素シテトハ其富貴ノ境遇ニ
現在シテト申シタモノニアリマス、行ヒトハ富貴ノ境
遇ニ居テ其富貴ニ溺レズ中庸ノ道ヲ行フト云フ義也、
然ルニ信念ノ薄弱ナル人物ハ一朝金力モ出來、權勢モ

ガ即チ貧賤ニ素シテ貧賤ニ行フト申スモノ也、其一例
ナ舉グレバ孔子ノ高弟タル顔回其人ノ如キ一簞ノ食一
瓢ノ飲ア陋巷ニ在リテ其樂ナ改メサルガ如キハ實ニ貧
賤ニ素シテ貧賤ニ行フト申スモノデアリマス
素ニメハ夷狄ニ行ニ乎夷狄ニ夷狄トハ支那歷代帝王領土ノ周圍
ニアル邊境ノ土地ニシテ王化ニ潤ハズ文化ニ浴セナル
未開ノ人民ノ住スル部落ナ云フ、而シテ夷ト云ヒ狄ト
云フハ畢竟國ノ東西南北ノ方位ニ依リ各其名稱ヲ異ニ
セル迄ニテ東ニ在ルナ東夷、西ニ在ルナ西戎、南ヲ南
蠻、北ヲ北狄ト云フ、茲ニ夷ト云フハ東夷ヲ云ヒテ西
戎ナ包チ、狄ト云フハ北狄ナ云ヒテ南蠻ナ包チ、約リ
東西南北ニ居ル野蠻人ノ部落ナ號稱シタルモノナリ、
若シ一朝不幸ニシテ身夷狄ニ在リテモ依然トシテ其守
ルヘキ道ナ行フノガ夷狄ニ素シテ夷狄ニ行フト云フノ
ニアリマス、一例ヲ舉ゲマスレハ漢ノ武帝ノ時蘇武ト
申ス人ガ武帝ノ敕命ヲ奉シ北狄タル匈奴ニ使シマスト
匈奴ハ武ヲ捕ヘテ大窖中ニ囚シ、或時ヘ絶テ飲食ヲ給
セス、此場合ニハ武ハ臥シテ旃毛ト雪ナ噉ンデ數日間
死セキル事ナ得、後ニハ武ナ絶海無人ノ孤島ニ移レ常
ニ羝羊ヲ牧セシム、武ハ十數年ノ間頗ル辛酸ナ嘗メ盡
レタルモ、毎朝漢ノ都ニ向ヒ武帝ヲ遙拜シ十九年ノ後

出來何ヲ欲シテカ成ラサラン、何ヲ求メテ得ラレバ
ラント云フ境遇ニナリマスト直ニ先ヅ宏壯ナル別莊ナ
管ミ、美女ヲ側ニ侍ラセ食膳ニ山海ノ珍味ヲ列スト云
フ如キ驕奢ニ恣ニナス者今ノ世少シトセズ、之ハ富貴
ニ道ヲ行フ能ハズ富貴ニ溺レタル者ト申スモノデアリ
マス、茲ニ富貴ニ溺レズ富貴ニ行フト申ス一例ナ舉ゲ
マスレバ、孟子ハ堂ノ高キ數仞糧題數尺、我志ヲ得ル
モ爲サス、食前方丈侍妾數百人、我志ヲ得ルモ爲サズ
ト云ハレテ居リマスカラ、孟子ヲシテ果シテ其言ヲ履
ミ行ハルモノトセバ、一朝志ヲ得テ天下ノ大宰相ト
ナリ、金力權勢並ビ有シ欲シテ成ラサルナク、求メテ
得サルナシト申ス境遇ニ至リテモ別莊モ營マズ、美女
モ侍セシメズ、食膳ニモ山海ノ珍味ヲ列チズ、即チ富
貴ニ溺レズ富貴ニ素シテ富貴ニ行ハレマシタ事ト存マ
ス。

素ニ貧賤ニ行ヒ平貧賤ニ 貧トハ無レ財也困ニ於財也ト申シ
テアリマス、衣食住ニ困ル俗ニ云フ貧乏者ガ貧ニアリ
マス、賤トハ賈少也卑下也ト申シニアリマシテ、身ニ
官位勳爵モナク輕賤ナル者ナ賤ト申シマス、其貧賤ノ
境遇ニ現在シ貧賤ニ心ヲ奪ハレズ自ラ卑屈ニモ陷ラス
人ニモ諂ハズ媚ビズ、毅然トシテ守ルヘキ道ヲ行フノ

遂ニ臣節ヲ全フシテ漢ニ歸リタリ、此事蹟ヲ賴春水先生ガ賦セラレタル有名ノ詩ガアリマス曰ク
題ニ蘇武像

十有九年金鐵脇　海風持節牧_ニ羝羊
渴來不_レ飲_ニ匈奴水　嗜_レ雪朝々拜_ニ漢皇

ト實ニ能ク事實ヲ詠セラレテアリマス、此蘇武ノ如キ
ハ夷狄ニ素シテ夷狄ニ行ヒタル人ト云フヘキニアリマ
ス。

素ニハ患難ニ行_フ乎。患難ニ患トハ憂也禍也、難トハ患也相與
爲ニ仇讐_チ也ト申シテアリマス、左スレハ人トシテ患ト
云テ憂フヘキ事柄ヤ難ト云フ仇敵トナリテ恐ルヘキ禍
害テ受クルガ如キ境遇ニ在リテモ、其憂患ヤ禍害ニ心
ナ動カサス、泰然トシテ守ルヘキ道ヲ行フガ即チ患難
ニ素シテ患難ニ行フノデアリマス、一例トシテハ宋ノ
文天祥ガ燕ノ都ニ於テ土室ニ幽囚セラレ常人ノ堪ヘ得
ナル患難ニ遇ヒタルモ毫モ其心ヲ動カササルノミナラ
ス、却テ其土室中ニ在リテ彼ノ有名ナル正氣ノ歌ヲ作
リ、其末句ニ古道照_ニ顏色_チト云フガ如キ忠勇義烈ナル
氣節ヲ發揮シ凜乎トシテ從容死ニ就キタルガ如キデア
リマス。

君子無_ミ入_ト而不_{コト}自得_ス焉。此ノ君子ヘ前文ノ君子ヲ指シ

入トハ往ク所トシテト云フモ同シ、意味ハ富貴ノ境遇テモ貧賤テモ夷狄テモ患難テモ、現在ノ境遇往ク所即チ入ル所トシテト申シタモノニアリマス、無レ不^{コト}自得^トトハ君子ハ己ガ今日現在ノ境遇ニ足レリトシテ外ニ待ツ事ナク、只其守ハキ道ナ守リ、上ミ天ヲ怨ミス、下モ人ナ尤メスト申スノテアリマス、此第二節ハ要スル所第一節ノ君子ト其位ニ素メ而メ行フト云フ事ナ解説シタルモノニアリマス。

上來講シ來リタル所、要之ニ我々帝國臣民タルモノハ教育勅語ニ於テ、我臣民克ク忠ニ克ク孝ニト宣マハセラレタル其聖旨ナ奉體シテ克ク忠孝ナ全フスヘキモノニアリマス、然ルニ忠孝ハ徒ラニ口ニスル而已ナラス之ヲ全ウセントセハ信念ノ堅固ナルヲ要ス、信念堅固ナラサレハ完全ナル忠孝ナ盡シ能ハサルハ之ヲ譬ヘハ砂上ニ堅牢ナル樓閣ヲ築キ得サルト同シ事ナリ、信念ヲ堅固ニセントセハ我々ハ先ツ現在一身ノ境遇ノ順逆ニ因リ心ナニセラルノ決心ヲ最モ肝要ト存シマス、此決心ヲ養成センセハ我々ハ先ツ現在一身ノ境遇ノ順逆ニ因リ心ナニセラルノ決心ヲ最モ肝要ト存シマス、此決心ヲ養成センセハ富貴ニ素シテハ富貴ニ行ヒ云々ト申ス子思ノ言ニ基キ、又孟子ノ所謂富貴モ淫スル事能ハス、貧賤モ移ス事能ハス威武モ屈スル事能ハス是ナ大丈夫ト云フガ如キ、又佛語ニ所謂火モ之ヲ燒ク事不能、水モ之ヲ溺ラス事不

(27)

「そんなに君は天香々々云つてゐるがだね君！天香も随分の堕落じやないか？もうあんなになつちや駄目だらうなあ、あのやうよ世間から種々難多な惡評雜言を受けてるじやないか、あの一燈園にや何だつたけ……さうだ愛の森とかいふんがあるとさ」「それがどうと云ふのだ」「どうも何もあつたものじやない、それが墮落の室なのたろこではね若い男女が互に相抱擁して、そして愛の意を表するんださうだ……何でも怪異なじやないか……表面はやわ信仰でござれいや愛でござれといつてる癖にこれが抑々の間違ひの始りと思ふね」などと相語ひ乍ら寄宿舎の門を出て行く二人の學生がある、一人をKと呼びYはもう一人の名である、「だが然し君！この天香さんは鳥渡も變りはあるまいが？天香さんは依然として天香さんだらう？彼は終始彼の堅い信仰を以て一貫するんだらう、そりや彼の日常の生活狀況彼の言ふこと爲すこと

雑錄

S 生

で明かと思ふね、身には艦被とはいくまいか兎に角貧相な着物を纏ひそしてまるで乞食のやうな生活を營んでゐるにも係らず王侯にも及ばぬ満足を覺えてるんだ、それ先日僕等の學校に來た彼の同志が誰も嫌がるあの便所の掃除を一文の報酬すら受けずして立派にやつて呉れたヒやないか、そして最後に寄宿舎の飯に感謝の舌鼓を打つて出て行つたといふことは君の記憶にもまだ新しいこと

だと思ふがね、彼の同志すらさうだ況や……をやだ、これでも彼等の何かがうかがはれると思ふよ」Y「そりや例外さ」K「そんあことが」Y「でもこの暑中休暇に○小学校で聘講習會を開催した際にあの天香さんも聘せられて講師の一人として來た、その時同志の青年を二三名件まではいいとして、この掃除なるものが門の前ばかりでまだ、只人目のつく所ばかりや、てだ、そして後の方は綠草が茂々と生茂つてるといふんだからね、これじや何と目に見ても宜しうないなあ、さうだらう？K「然し天香さん丈はるんをことは……まあ彼の著書たる懺悔の生活でも見て見給へ畧如何んなものかが解るだらう」Y「解る

たつて彼等の云ふことと行ふこととが一致しないもの……

折からあまり廣くもない道路を大巾でブー／＼と駆来る自動車丁度Kの前に來たとき運悪く道の窪溜の泥水がビチャツ！「ひよお！無茶やるな……如何に天下の大道とはいへあゝ癪に障る少し位は憚ればいゝのに」とこぼすばかりの彼方に逃去つた。「癪だね／＼」とズボンの泥を掃ふが粘土は中々落ちやうとはしない、「ひソどうでももう何といつても遅い、白い煙に臭い香を名残に二十間いい」と鼻をいからせてフー／＼いつてが後の祭で致方もないこと。路傍の稻穂にとまつてた蝗を引提へたK地に投付けて多少の腹が癪なたらしい、矢張これが人間の缺点がなどYクス／＼と笑ふ。



Y「何？出家とその弟子がどうした！」K「それを讀んではいけないとさ、あんなものは吾々學生否眞の人間らしく活きんとするものは忌むべき書物だといふのだ」K「馬鹿！君も君だね、古い頭の所有者だな、君はあの何處を讀んだのだ？」Y「まあさう恐るなよ、僕がさういふのじなやい！それは僕達の先生のいつたことさ……勿論僕もこ

われを真に理解し得るもの果して幾人かあるだ、一度誤つたならそれこそ大變だ危険だ、だから寧ろ讀まない方が得策だらう、君子は危きに近寄らすだ：この意味に於て先生の云はれることも一面の眞理が含まれてゐると思ふね」Y「それも尤もだぬ」と話は次から次へとはすんで行く、道は次第に爪先上りになつて行く、兩面には火のやうな漫珠沙華が茫茫と燃立つてゐる、Kはそれに憧れ一本ポンと折つてやあこれは何科の植物だらうねこの辨を見れば百合科のやうにもあるが、いや鳶尾科だらうなぞと可なり博物研究に熱心な彼はその花をいぢりまはすとY「何科かよく覺えんが多分石蒜科だらうせ、兎に角毒草だその手を越ると中毒するよ、僕方の方ではひがん花とか又は狐の火とかと云つてゐる」Kは尙もろれといちくります、と運命の然らしむるところかK右側の溝に足を突込んだその折の彼の苦笑つたら天の無情と皮肉とを呪ふやうに思はれた、



二人は涼しい龜山の木蔭に腰を下す、廣い高商のグランドも狹として猛練習をやつてる白いユニホームを眼下しながら小さい人類にはあんな遊戯があるんだなあと不

思議がつてゐるやうな顔付Kのは讀懸のエミールをポケツトから取出して前の續き即ち百十五頁から讀始めた。一方Yは藝術家丈あつて一にも音樂二にも音樂、もゝ何だか見當のつかぬ唱歌を足に合せて唱ひ始めた。彼は音樂なくては活きて行かれないといふ程の人間である、丁度今日もピアノ練習に行くところをKが無理やりに引張り出したやうな譯で三度の食事は忘れてもこの練習には餘念がないといふ男である、先日も何かの用事で二日間中止してゐたら病氣になつたとか、その位に熱心であり藝術の爲に身を捧げんとしてゐるのである。

ところへ「どうです」つて云ふ聲にれどろかされて後に振返つたY歌をひたりと止めて何だか恥づるような面付で「やあ誰かと思つたら……」これは友人Mであつた。一方エミールに視線をなげてゐるKは常に櫻牛の云つた須く人生を超越すべしを口にする男をあつてそれ丈態度も重々しく何處となく落付がある、悠々縋々と面をあげて何か云ふかと思へば唯微笑をMに與へたばかりで再び彼の面は彼の読みつつあるエミールの上に投せられた、暫くの間YはMと何か面白く語つてゐたが不圖Mのボケツトに手札形の寫眞機のあるに目をつけ「君それを一つ撮つて呉れませんか」M「え、丁度もう一枚丈殘つてゐ

の先生は隨分な舊思想家だと嘲つてゐるんだ」K「僕は敢てその先生の名を知らうとはしないが、僕達のいただいてるのにこんな先生のることは大に愧どし不幸とせねばならないなあ、だが然しこ」Y「さうだ僕もさう思ふね彼のやうな人間は馬鹿だといつて罵るよりは寧ろ可哀想な奴だ憐れむべき人類だと愛すべきものださ、考へるなあ何だ馬鹿な事をいつてゐるなと聞いてゐたのじや、どころがたね、僕のクラスのMが大に憤慨して屹然と立つて曰くた、「何故悪いんです？そんなことをお仰りますが私はそれが知り度いんであります」とやるじやないか僕も氣毒で堪らなかつたよ、さうすると、先生の曰く「君方はあんなものを讀むやうな時間があるかね？まだ／＼他に爲すべきものがあるんだら？」まあこれでなければいゝのに「それはそれとして何故に悪いんです？そんなに悪いものがどうして神聖な我校の圖書室の棚を飾つてあるんでせうか？まさか社會に害毒を流すやうなものが購入される筈はありますまいに」さうすると「さうかね實はわたしは讀んだことはないのだがね」「その時の彼の面に満ちた羞恥の色つたら僕も氣毒で仕方がなかつたね」K「さうか先生も先生だが然し現代の學生にしてだ

からじや寫しませう、K君はどう?」Y おいK君一
撮つて貰はうじやないかね」とKどこまでも粘液質悠悠
と腰を擧げる、そして外してゐた釦にホックをかけるに
反しYはわざくそれを外し而も腰の手拭を頸に巻き腕
を組む、そして帽子はどいへば阿彌陀にかぶつて太陽の
方に向つて中空を睨む、その様たるや天下に我程偉いも
のはあるまいといつた風である、同じ人間でありながら
かくも性質が違ふものかなあとはMの思つたこと、それ
が全然眞反対なのである、それだに双方互に氣が合つて

あてか何處へ行つても同伴せぬことはないのだらうか
何故にかくも仲のいいのであらうか、それにも譯がある
共に彼等の一人は幸といつてよいか不幸といつてよいか
その家庭の事情なり彼等の惱悶「人生に對する」がそつ
くり似てるからだ……うこだ入學以來お互に慰め合つて
今日まで來たのであつた、双方相互に理解してゐる間柄
である、所謂己知の親友なのである……だからKにと
つてはYが必要であり又YにとつてはKが無二の慰安者
であることを切に感じ、Kのゐないときは一種の淋しみ
を感じざるを得なかつたのである、といつて常に平穏々
々で行つたかといへばさうでもない時には大濤波瀾頭か
ら陽氣を立たすといふ時もないでもなかつた、が然しそ

あなた先刻下の茶屋で何か忘れたものはありますか
?」に「おおと手を打ちさうだく樂譜を忘れたいやどう
もありがたうございました」と再参禮を述べKをひいて
石壇をころがるやうに下りて行つた少ししてスー／＼い
つて歸つて來た、Y「あつた／＼命よりは大切なこれを
忘れて堪るもんか」その時もう高商マンはどこかへ行つ
てゐて居らなかつた、田舎から出たものらしい老夫婦が
元徳公の銅像を仰いで何か語つてゐる外には猫の子さへ
見ねん、彼等にとつてはこの人工的美が長門峠のやうな
世界的奇勝自然天然の美よりはいくらか上手に見ねた
らしい。

不知不識の中に二人は北側の石壇を下る、恰度五六人より成る女學生の一團に出會す、彼等は多數なるが故に群衆心理によつて何等耻らしきころなく横隊を作つて K Y に突あたらんばかり、如何な多辨の Y もこの時ばかりは何一つ言得なかつた、 Y 「偉い勉強家もゐるものだなあ」と思へば何だ人を馬鹿にしてらあ」 K 「何か?」 Y 「何がつて奴等の持つてた本さ、僕はあれが氣に食はれてや、英語の本か何かだらうと僕のやうな不勉強家も愧入つてゐたんだが何によあればハイチの詩集だもの、たかが知

れもうの當座のこと、後は依然たり男子の交り、それ丈
互に理解し信用してゐるのである、撮影してしまつたM
何か思ひ出したのか「これで失敬するよ」とそこへで
歸つて行つた。どうも有難たうとはYの口から硬せられ
た感謝の辭であつた、Kの眼に表はれた表情で彼も同じ
く感謝してゐることが明かに知られることが出来た、彼
等の後を高商マンが二名共に黒と鼠の上下を付けそれを
夕風に靡せながらシガ一の香高く徐に石壇を上つて來た
それと同時にKの胸には次のやうなことが浮んだ、授業
をサザオつて松の木蔭の芝生にノートやインクを放棄つ
て横臥になり、ニコチンを含んだ煙を非衛生的なりと知
りつつ尚肺臓の中へ出來る丈多く吸込んで圓い輪を空中
にフワリ〜〜とつくつてゐたものや、お午頃になつてテ
ク〜〜ノートを狹んで悠々校門をくぐる學生、時には赤
い酒綠な酒黄色な酒をあふり飲み、のんでは唄ひ唄つて
は又飲みするのや、夜遅くへべreckになつて大叫の体で
道路通行も安眠妨害とあつて拘引されたとか、故郷の爺
父は皺のあつた澤庵で朝飯に舌鼓を打つ人間もあるたら
うになどとか、或は又高等學校の生徒はまた〜〜前途遼
遠な丈あつて意志も堅實でもある……など
二校を比較して見たりした、ところが例の一人が「もし

を論して己まなかつた林子平か高山彦九郎の様に想はれて可笑しいといつてKがくす／＼笑ふ、Y、奴等に餘計なことを教へるからいげないのだ：一そのこと昔のやうにいろはか女今川位で濟しておけばいいのに」K君もそんなどとをあまり云ふと後藤さんが恐るよ、はあは：」Y「後藤つて？」K「あの靜香さ、感謝生活で有名な：知つてるだらう、あれよ」Y「知つてるきもこの圓天香さんと一緒に講師として講習會へ來たよ、僕も聞いたもんだその話が面白い、よく聞き給へこんのがあるんだ、あのね……君達が蚤一匹蚊一匹殺すにもどう思つて殺すかといふのだ、路傍の草一本を引くにも憐みの情を以てせよといふのだ、これを吾々の人類の上にも注いで行かなければならぬといふんだが僕等はそんなことは夢にも思つたことさへないのしや、君はどうかね？」K「僕もしや」Y「それから一片の肉を食べるにしても可愛想にも同じ哺乳類たる牛の生命を絶つて吾々の血となし肉とするのだ、と唯それでもいいから思つて食へといふんだが、吾々がかうして太平の御代に恙なく活かしてもらつてゐることすら考へもせず隨て感謝など思ひもよらぬのだ、とにかく考へて見れば何とか済まぬ氣がするね、然しそんなことばかり考へてわた分には何も出来ることではないよ」とばかり考へてわた分には何も出来ることではないよ

まあ考へない間が人間の天下であり人間らしい生活が送られるのだらうね」K「然し静香さん云はせたらそれでは眞の人間味は味はれないと否定するだろうよ」Y「それからこんなことも云つてゐたせ、日本の婦人はあまりに残酷だといふのだ、それは何かといへば、例へばた夏になつて澤山の蠅が出て來て御飯の上にズンと飛んで行くだらう?、それをこん畜生奴といふやうな顔付で殺すのが如何にも残酷だといふのだから堪らないじやないか、誰だて可愛想だと思つて敲くものがあらうか、兎に角靜香は人間じやないよ! 但し普通のだせ! 謂はば奇人だね」

二人はもう縣廳の宏壯な建物の前に來てゐた、そして丁度その角を曲るゝの途端不圖同シタラスのW君に出来した、Y「何處へ行つたの?」W「鳥渡營所へ面會に行つた實は僕の義理の兄が這入つてるんでな」それはさう君方何處へ行くの?」Y「僕等はの……まあ鼻の向いた方に行くと思つてれば間違あるまいよはあは」とK「W君行くかう! 一儲にね、今から香山園か瑠璃光寺へでも行つて見やうと思ふんです、行きませうや?」

K「人間の靈魂といふものは果して永久に生きるものだらうか」と同時に殆ど反射的に W「僕は生きるとと思ふ」Y「僕はゐないと思ふね」とかうした氷炭相容れない二つの答が發せられた、Y「そんな馬鹿なことがあるものか！靈魂なんていふものは宗教家や思想家が人生を説く方便として云つた言葉だ、事實そんなものが一々生きてゐたら地球上の將來はどうなる？はあは……」W「そんなら君の家は佛を祀らないのかい」Y「そりやあるさ」W「そんなら先祖の年忌や法事をつとめるだらう？」Y「時々つとめるよ、然し僕は知らないつさ、只父や母がやる位のことさ」W「そんならそれは何の爲だらう」此處に一大矛盾が生じて來た「Kは黙々として聞いてゐたが彼はごつちとも決定がつかぬらしい、彼の發議がこれまで程でも熱心と興味とを以て容れられたのを誇るかのやうにも見えた、Y「僕は無宗教主義だ、自己以外には何物をも頼まぬのだ、從て神や佛に用はないから祀らむ

か」W「さう真向から出られては些か答辯に窮するが、僕はかう信するんだ……これが信仰なんだね……巧妙な靈智を稟けて天から生れて來た人間の魂が、その人が死んでしまつたがらといつてそのまま、魂までも死んでしまふものとは思へない、死んでしまはずはないと思ふから誰だつて神や佛として祖先の靈を祀つてゐるじやないか、世界の何れの國を問はず寺院のない所があるか、あの寺だつて毛利公の靈魂を慰める爲に莫大な金を投じて建てられたんじやないか、これは明に靈魂消滅の論旨を裏切つてゐるものと思ふね」K「君等の論據は薄弱だ結果から見てかくあらんと推察したに過ぎないのだ、成程我々は寺にも詣るし、先祖の靈も祀るがこれは一種の習慣だ、理智の問題でなくて情義の問題だ、ありもせぬ魂と無理にあるやうにして恭しく讀經し禮拜するのも、その人の生前の人格を尊崇するからであつて我々は現在のろの人々の靈魂に禮拜するのではない」Y「勿論僕寺たつてさうだ、佛壇に祀つてある位牌とても譯もなく崇拜するんじやない」K「その人の靈魂の化石! 否化木として禮拜するんだね」V「じゃ偶像崇拜か」K「あゝ矢張り僕には解らない、人生のことばは解つたやうな解らないやうなそこ

に妙味がある……さうだ解ったときはもう靈魂が肉体を抜出す時だから……もうこんな馬鹿いや馬鹿といつては失敬だがこんな話は止めやう」同時しか三人は木町橋の袂に出てゐたとは誰一人として知らなかつた。

Y 「君! Sを持つてゐないかね」W 「吸はないものがざうして」ろんならといつてYつかくと街の小店に這入

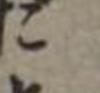
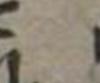
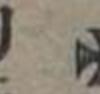
V 「真直つて? そんなことが出来るものか」W 「なあに出来るよ、あんごころ、さうだ、あの八坂神社の角を右に曲がれば後河原に出られらわね」Y 「僕が云ふのばそんなどではないよ、物理學的よ、數學的に云つてだ絕對的真直には歸へれないといふのよ」K 「又例の屁理屈を理解する」V 「でもさうだらう、AINSTAINの所謂相對性原理によつて相對的には真直がへれても絶對的にはがへれないといふのはあは……さうだらう? K君! まいづたか」K 「その位のことは知れ切つてるよ」W 「随分非社會的な法螺吹だなは……」K 「時にあのア博士が夢のやうに幽邃明眉な我國に憧れてこの十一月頃には來朝するとかいふ噂があつたがさうかいね」W 「さうくそなことが何日やらの新聞に出てゐた……それはそれで我國の何とか博士がその論説を否定してるがどういふもんだけなあ!」街の右左の軒には淡く電燈が灯つて

K 「君も隨分の不經濟家だね……その釣銭は當然君の受けべきものだ……受けないといふのは實に不都合だ」W 「あんなに金があれば僕に貸して呉ればいいになあさうしたら僕はせんに有難く思ふだらうに、あんなに要らぬ金があるのに何故この間も葉書一枚が買へないつて舍全体を借りに歩いたんだねはあは……」Y 「まあ僕は御承知のやうにこんな淡白な人間よ。ある時はうんと使ふんだ、路に乞食でもねれば五銭でも拾錢でもほいと投げてやるのじや」W 「して見るとどこが江戸子らしいところがあるね……若しかすると幡隨院長兵衛の子孫じやないかい、は……」Y 「無茶いぶなよは……」K 「兎に角日本人はだ金銭にあつさりとでも、ふか經濟的觀念が至て乏しいんだ。……然し或る部分の人例へば商人などは限つて多少の考もあるらしいがね……この觀念の有無は

聴て我國の將來の運命を支配するもんだからね、昔の江戸子氣質では駄目よ」Y 「もう何もいつて呉れるな、よく分つた、けれど君方よくさき給へかうだらう? 今の金たてせうせ國內に落ちるんだらう、唯金の落場所置場所が違つてるばかりといふ譯だらう、この意味に於て僕は先刻の僕の行爲も決して不經濟ではないと思ふね、どうだ?」K 「それが抑不經濟の始りたのだ」W 「勝手な理屈もあつたものじや嘔は……」まあどうでもいいやあとY はSに火をつけてスへへと薰らせた、W 「君: それが美味しいかね」Y 「美味しいとも、否美味なざいふ言葉ではとても形容出來ぬね……遙よ美味を超えてるね、それはいいもんだけ……一つやり給へ」とWの方へ敷島を突出す、W 「その御好意誠に有難いがまわ止して置かう……吸つて見たいのは山々だけれど、僕はここまで制して行くことが出来るか……これも僕の修養の爲だと思つてるんだ」Y 「それも宜かろう……然し僕はこんな主義なのだ、一切衝動皆満足! これだね……だからその衝動々々に満足出来ればそれでいいのだ、例へばSが吸ひ度かつたら吸ひWが飲たかつらのみ、或は又本が読みたくなつたらよむ、まあこんな主義なのだね」W 「そんなら吸ひたいときには人のホケツトからでも取出し

て吸ひ飲みたくなつたら店に飛込んででも盗んで飲み、本のよみたいときは人の讀むのを引たくつてでも持つて行くとかういふんだね」Y 「そんなことはないよ、それは君の解し方がよくない、それは兎に角穩富な手段でやるさ、買ふか貰ふか借るかするのよ、その位のことは分つてらあ」と又スへへと一〇吸んだ、W 一切衝動皆満足主義! 中々以て怪しい主義だねは……て「うん! それからだ君! そればかりで果しご悉皆が満足出来ると思ふかね」Y 「出来るども、事實僕がそれで満足してゐるさ、仕方がないじやないか、法律はちゃんと許してるのでないひし何ぞいひし、一ぶくやればこの人間苦の世界から超越してハラダイムにでも遊ぶの感があるね、實際体验したものでなければ分らないよ、僕はこの時程愉快なことはないな、僕はこれで充分に満足し得てると思ふね」W 「成程! 然し……」と尙引續いて論議せうとしたがその間へKが這入つて「君のいふ悉皆満足といふのは少し解し方が誤つてゐる眞の主義に於けるその主義はそんなもんじやないだらう? ねK君! 君もさう考へるだらう、僕はかう思ふんだ、若し君がSの大体に有害であるといふことを知つたら君の心に満足が出来るだらうかど

いふのだ、それにこんなものは本當の不經濟極まるもの
我國に於ても一年に何千萬圓といふものが煙になりつつ
あるんだ、だからこれを取て喫する奴は亡國の民とでも
いつてやり度いんじや、ろれに君が舍に歸つて舍監の前
でスカリ／＼と今やつてゐるやうにやれるかどうか、……
法律は之を許してゐても何者かに束縛されてゐるだらう
？これで果して君の心に悉皆満足が出來やうか、僕はそ
れを疑問に思ふね、皆満足主義たる以上は一つでも不滿
な点があつては成立たぬ譯ないやないか、君の主義は論
據が根本から間違つてゐるのだと、さうじやないか
ね君！W「君もだらう」とY「僕はもう止めた／＼」
とホケットのSを悉々河原へ投込んだ、K「そんなに怒
らんでもいいじやないか、あんなことをいつて却て失敬
だつたね」Y「そりやない、僕は止めた」とそれはかり
口にいつてゐる、グア／＼と數羽の家鳴がSの箱を啄き
破るのを子供のやうな顔付でWが見てゐるのも可愛らし
い。



→(37)←
れなるはこの子でございだ、自由に生きんとする吾々人
類を校則なる不規則なるものに束縛されてしまふのだ、
吾々は一時も早くこの城から脱しなければならない、一
時も早く各自自覺めねば駄目だ、各自に自覺さへあれば
こんなものは全然不要だ、かくされる事と誰も恥辱
とは思はんかね……」W「僕も君のいふことに共鳴する
ね、だがれ互に自覺この自覺といふ語は現代到るところ
で流行してゐるもので猫も杓子もいつてることなのだ、そ
のいつてゐるもののがどうかういへば自覺の何物たるやを解
せあいのだ、人が自覺といふから俺もいふ式のものばかり
り、だから駄目といふのさ、實際自覺の意義を解し得る
人でも自覺、自分にござい丈の自覺があるだらう、僕はろ
れを疑はざるを得ないんだね、自覺さへすれば自由が得
られるなんて口々に云つてゐるが眞にその自由なる語を又
如何に解釋するか、これが又僕の疑問よ、放縱あるどこ
て門限も必要だと思ふ、さうでないと第一規則だつた生
活が行はれんもの」K「あゝ鐘が鳴つたせ、早くかへら
う」Y「あゝ矢張り……あゝどうしても僕は……ねばな
らないかなあ」日中の喧嘩からあたりは次第々々に沈黙

も早や冷めてしまつてゐるじやないか、まあ見給へあん
子供までがランニング用のシャツにパンツでざん／＼や
つてが今に御覧これに代るべき何かが近き将来今三
四年もしたら來ることだらうと思ふね」Y「さうだとも
屹度來るよ、今度は藝術方面が盛になると思ふね、特に
音樂圖畫のやうなものにきまつてゐるよ、今日もY座でW
俱樂部の演奏大會があつていつてゐたやうにだ、兎に
角かうなると僕等の世界にある譯さ」とY鼻を高くする
W「ナニ君が如何に威張つてもその生命も永いことは
ないよ：それは瞬時にそれの如しだ、又これに代るべ
き何かが現はれるからね、第一日本人といふものが物に
は熱し易く又冷め易く出来てゐるもの、仕方はないよ、例
へば薬罐は沸くことも早いが又冷むことも早いといふ
調子だねはミニコレで世の中は済んだものでもあるかし
れないが僕はそれよりも遅いながらも一旦沸上つた以上
は容易に冷めぬといふ鐵瓶式の人でありたいと思ふ、こ
れは朋友間でもさうだが」「もう直に門限だせ」とKが
腕時計を示した。

高商のグラントにはまだ澤山居残つて來るべき縣の大育
會に好成績を擧げんと猛練習を續けてゐる、V「ああ又
五時なり、之より種々の準備を了して關西線の車中の人
となりて和歌山市驛を發したるは午前六時なり、此の日
空よく晴れて絶好の遠足日和なり、汽車の進むに隨ひ涼
しき朝風は頬を掠めては去り、車窓の眺めは幾度か轉じ
行く、うね／＼と起伏せる山脈、朝日に輝く村の屋根瓦
土蔵の白壁、これらは我が車窓の瞳に絶えず廻轉せり、
此處にて下車し南へ南へと進み行けり、田圃路にかかり
て上り行くこと十町許り、橋を渡れば九度山に到る。真
紀の川の鐵橋を過ぐれば汽車は早くも高野口驛に着せり、
田父子の蟄居せし處なり、町はずれの路の右側に深碧潭
藍の水濱ひ淵あり、眞田大助が幼時水泳せし所なりと聞
く、奔湍なす谷川沿にひ尙も進めば椎出に出づ、これよ
り愈々山路にかかる多少の傾斜あり、行くこと半里、山
の一角を曲れば我等が目指す高野山は巍然として我等が

に移つて行く（終り）

□高野山へ登るの記
山本浩

路傍の草木青々として眞夏の暑さ甚だしき七月二十五日
家近き梢に鳴く鳥の聲に夢を破られ床を蹴りたるは午前
五時なり、之より種々の準備を了して關西線の車中の人
空よく晴れて絶好の遠足日和なり、汽車の進むに隨ひ涼
しき朝風は頬を掠めては去り、車窓の眺めは幾度か轉じ
行く、うね／＼と起伏せる山脈、朝日に輝く村の屋根瓦
土蔵の白壁、これらは我が車窓の瞳に絶えず廻轉せり、
此處にて下車し南へ南へと進み行けり、田圃路にかかり
て上り行くこと十町許り、橋を渡れば九度山に到る。真
紀の川の鐵橋を過ぐれば汽車は早くも高野口驛に着せり、
田父子の蟄居せし處なり、町はずれの路の右側に深碧潭
藍の水濱ひ淵あり、眞田大助が幼時水泳せし所なりと聞
く、奔湍なす谷川沿にひ尙も進めば椎出に出づ、これよ
り愈々山路にかかる多少の傾斜あり、行くこと半里、山
の一角を曲れば我等が目指す高野山は巍然として我等が

塗りの橋見たり、是不動橋にして不動坂はこれよりなり。かくてこの橋のたもとなる一軒の茶店に腰打ち掛け、持ち来れる結びをつまみぬ、かくする間に高野山のつきものなりと聞きし雨降り初めしかば、ここにて一枚の油紙を買ひ之を身にまとひて愈々不動坂を登り初めぬ、此の坂は名の如く傾斜も著しく加ふるに屈折せると少しあと路に變化なきとにより倦怠と疲労とは漸く我が身にれろひ來りぬ、坂を登りつめたる所に一字の堂あり女人堂と云ふ、往時、女人はこれより内に入ることを許さざる撻なりしとぞ聞く、之より奥の院に詣でんものと道を行けば驚くなかれ此の高山の頂に一箇の町を成立し道の兩側には警察署あり、郵便局あり、而も電話の設備あり、かくて一の橋を渡れば老杉枝を交へて天日暗く、幽邃の氣山内に満つ、これより杉の下道十町許の間、左右に古今貴賤の墓碑立ち並びそぞろに哀れを添へぬ、玉川の橋を渡りて奥の院に到れば、浮世の塵もここに浮ばず、自ら肅然として容を改めて禮拜しぬ、富者の萬燈貧者の一燈など見て歸途に着けり、時間も切迫したればやゝ急げり、かくて我等は又もや不動の險を下り花坂、椎出、九度山の町も夢の如く打ち過ぎて何時しか下山し高野口驛に着せしは午後四時頃なりき、やがて氣笛一聲

車は搖ぎぬ、其の後我が和歌山市驛のプラットホームに現はれしは午後七時なりき、これより市内電車により無事に家に着きぬ。

△詞藻

□自嘲自罵 宮内謙吉

正義は果して最大の權威なりや
道徳は遂に人生の勝者たるか
「ソクラテス」は毒杯を
「クリスト」は十字架を
彼等は死刑に處せられた

修身の教科書は不備だ
抽象に失し、偏頗の様だ
無理が通つて、道理が陰口をさく
のが眞の世界じやないか

商賣人とは不正者の代名詞の如く思はれて居る

正義が常に勝者ならば誰か好んで不正を働くかうぞ法律は適用されて、悪人を助くるではないか
辯護士は常に善人の味方か
善人も一色ではないさうな
盜人根性は誰にもあるのだ
大聖死せすんば大盜止ます
况んや小盜輩をやだ
隠すな隠すな、腹がふくれるぞ
放屁せよ、大に放屁せよ
ああこの不備な文字、不便な言葉
人生は複雑だ
人心のアリケートな事、筆紙に盡せるものか
書く後から、云ふ次ぎから
大火事の煙渦の如く、勢猛だ
泉の水のふくよりも
まだまだ早く、湧いて湧いて
しかも有限の脳髄から、無限に湧くのだ

利害得失、快樂苦痛
見よ、基督教教師を

懺悔の生活者を
福音とは何だ
か前達は體のいい乞食じやないか

運命は經來つた浪だ
乗りかかつた船を棄てれば、さうなると思ふ?
何故悲觀するのだ
美も幸福も求むべき筈のものでない
本末を違へて、下手に苦しむな

意の盡にやれ

後悔したら、再びせぬまでの事
前車の覆は後車の戒

人の振見て我振なはせ

老人の云ふ事はさくこと

後悔が少くて済ひだらう
あのクドイのに腹をたてな

もうぢきに死ぬのだもの

論語は知らなくとも、生活は出来る

牛の首と天狗岩は因みて牛若山と命名せられた
る嬉しさにその四季の景色と雜どをよめる

春

櫻咲く向ふか岸のよし経と

牛若山はやかて名乗らむ

夏

夏川に涼しき月と賞つるなり

牛若山は裳裾ぬらして

秋

たち並ふ天狗か峯もけふされて

紅葉色濃き牛若の山

冬

いはけなき牛若山は雪深み

鳥帽子か嶽の袖にかくるる

雜

牛若山辨慶瀧と契りしは

思ひ金糸出合なるらひ

△通 信

以下載録するは萩地を去られたる會員諸兄
より余に與へられたる書簡の一部にして諸

兄の面目躍如たり

北 汀 生

□山口高等學校より

柴 田 美 稲

(前略)自警會も漸次隆盛に趣きつつある事、何よりの慶事と存じ居り候、先日は自警第二号御送付被下有難く御禮申上候、内容も初刊號に比して内容大に豊富に、編輯の方も著しき進歩の跡の見ゆるは、如何にも悦ばしき事に有之候、この冊子を見るにつけても、昨秋は原稿を甚しく遅延させ、督促を受けし事、汗顏の到りに候、彼の原稿にも記せし如く、當時は私の思想極めて混亂せる時期にして、發表する程には頭まとまらず且又作文を作った様な考へにて出鱈目を書く事は私の氣が許さず漸くに覺束なげにも書きたる有様何卒御推察御容謝願上候
差出がましけれども私をして自警第二號讀了後の感想を一言せしめられ度く候評して正鵠を得ず言ひて不遜なる点も有之候はば不束者よとおぼし召し御宥し被下度候第一に頭に浮びたるは整然としたる編輯、諸君の卓越せる言論大に見るべきものあるにも拘らず何だか基礎の弱い浮々した誇張した様な感に候第一號に於て私の書きたる

月は三笠山に限らぬ

歩いてみよ、道は出来る
犠牲だ犠牲だ、人間の一生は

□長門峠 雜吟

北 汀

櫻 の瀧

汗冷う豪室に瀧仰ぎ見る

滴り瀧

新緑の滴り瀧や朝朧ら

暗り淵

幽淵奇瀑うす暗や岬青葉して

蟹瀧の瀧

棧道の危きに賞づ瀧若葉

湯の瀧

岩に湧く温泉煙しるし今朝の雪

阿武川下り

杜鵑鳴くや船に傳説の悲話をさぐ

船下す小赤壁や月今宵

今度北海畫伯より長門峠内柄吟なる余が小丘を

ものは今より考ふるときは極めて幼稚なる何等根底にひそむ力なき事を痛感せられ候この感は何によるものならむか思考する所によれば一は會員が比較的若いにもよるならむ二には青年時代の通癖たるロマンチックなヒロイックな氣分よりして兎角自分を省みる事少く徒に言を大にする傾にもよるならむか、六ヶ敷單語と並べた行列(是は酷評でありませうが御許し下さい決して惡意からではありませひ會のためと思ふて申すのです)の様な文

の弱点否人間としての弱点缺陷等を全然無視した様な文は讀むには剛壯にて一時の快を得べきも實行の上には何等權威なきものにはあらざるかと存せられ候徒に修養々々と叫び徒に感激し徒に憤るもこの人間性を無視し吾等の缺陷を忽にせんか其言論は實際問題には余程縁遠かるべく元來煩悶多き青年時代に(會員の中特に上級の人)空しく口に修養を唱ふるも切迫せる諸問題の解決に何等益する所はなからく却つて煩悶を増すのみかと思考いたされ申し候

次に社會を憤り社會問題政治問題に論及せるあれど是は少々門違ひにあらざるか勿論我等が大先輩は弱冠にして天下を以て己が任とし給へりさて時代といふ背景を無視して物を考ふべからず直に我等これを學ぶべきや否や

(前略)ホカ〜と暖い春の陽が斜に硝子障子より射し込む
ひれ午四百幾十名といふ學生が食堂に集つて愉快に晝食を喫して居りますそして私もその一人でムいます處が三年生の文書係の大音聲で叫んだ中に「櫻井」つて云ふのがムいましたはて誰からだらうと思つて行きますすれば誰あらう先生よりではムいませんか私のこの時心はとび立つ許り直ぐに開封致しますればあの様な誠に有難いお言葉只々感謝の他はムいません假合一師範生に過ぎない

(前略)御承知の如く私の當校入學は家庭の都合上致し方もない事を諦めて居ります是も皆老父母の爲否自分の爲今暫く我慢致しませうけれど一度此處に學ぶ以上は飽くまで神聖なる教育事業に從事する者でご座います昨年

■山口師範よりの第一信

櫻井武三

况んや會の標榜する自警の趣旨よりすれば他を憤るより先づ自ら内に顧み根底的に自己を明にして然る後他に及ぶも強ち遲からずと存せられ候尙申上度き事も多々有之候も今日は是にて拙筆何れ後日拜眉の時もわらば万々申述ぶべく候経りに先生の御加餐と會の隆盛とを祈り申し上げ候

小生近頃佛の慈悲なるものさよやかにも感せられ始め候御喜び下さらば幸甚 大正十一、四、三、

(前略)先日は自警第二號御送り被下有難く拜見仕り候吾々凡俗の頭にては考ふることも出来ず又爲することも能はざる事多く羅列せられ徒らに年のみを取り行く私も聊か愧かしく相成り申し候今之分にては今後十年二十年にて付ては一意專心之が道に勉めん覺悟に御座候然し櫻井のは到底駄目な事と存せられ候が駄目なればこそ一層の奮發を要すてふ意氣を以て勉勵致し居り候へば是亦御安神被下度候惜て小生今度山師第二部に入學を許可被致候に將來は單なる小學教員に非らざる事を御記憶被下度候ろの内御自愛專一に草々 大正十一、四、十六、

■山口師範よりの第二信

櫻井武三

中學卒業以來私は世の總ての事が不平で不平で仕方がなかつたんでムいます人の一舉手一投足までが瘤に障ったのでひ座いますそれが此四月まで毎日〜煩悶に煩悶の連續で夜もロクに寝られない様な事でムいました處が感する處がムいまして今日に於ては世の總ての物總ての事が皆自分を微笑を以て迎へて呉れ自分を喜ばせて呉れる様な感が致す様になりました過去の私は實に哀れむべき者でムいました己の何者たるかを解する事との出来ない者でムいました(下略) 大正十一、五、四

■山口師範よりの第四信

拜呈六日付の御芳墨昨日確かに落手致しましたろしてれ

願ひしました「吉田松陰言行錄」「吉田松陰」の二冊も今日届きましたから御安心下さいませ僅か二つの小冊子とは云へ此中からそれ丈のものが得られる事だらうかと思へば最早読みぬ前から祟るの念が湧いて禁ずることが出來ません此書を読み終へました時の私と今の私とは大きな差があることを信じて疑ひません

先は御禮芳々 勿々

大正十一、五、九

■山口師範よりの第五信

(前略) 先日本校に一偉人といふべきか奇人もいふべき

か兎に角普通人と大に異つた者が参りました彼は名のりませんので姓名は存じませんが生れは四國で今はかの天香を中心とする京都の一燈園の同人でムいます年頃は三十歳餘りで見るからに既に常人に非らざることが知れましたこの人が學校の便所の掃除をやらせて呉れ何等の報酬を受けやうといふのではなくからと廣い便所を悉く雑巾を以て奇麗に掃除して呉れました而して終に御飯でもいただかればこんな結構なことはない云つて寄宿舎の麥飯に感謝して歸つたのでムいます吾々には逆も眞似難いことでムいます彼の主義は自己の我慢を取り去るといふことにあるそうで人の嫌ふ便所の掃除をやるもの此主義の爲めといつて居りました彼は今から武者小路さんの日向の新らしい村へ見學に行く途中徒らに日を過してはといふのでかくして居ることでムいます(下略)

大正十一、六、十一

第一の元氣者で君はどこの中學と卒業したのかと已にグラス會で名乗つたにも拘らず時に應じ機に際して同級中の者が質問します松陰先生の血を受けて教育された男は生きてゐると云つてやるのです頗る痛快であります尙今後も出来る丈け努力する考であります夏季休暇には參上致しますので其際詳しく御話し致します

大正十一、五、三〇

○松山高等學校よりの通信

高田 良雄

(前略) 承れば先日海軍記念日に松陰神社で自警會が開かれる様な様子でした如何なりましたか私等は昨日ボートレースがありまして私等の組は大勝利でしたこの頃は學校の勉強は第二として精神修養に努力して居ます組中

○今治よりの通信

高田 良雄

(前略) 私儀兼て病氣の爲め當地に保養罷在候ひしが愈全快仕り元氣も十分恢復致し候間本月二十日頃松山へ向ふ豫定に有之候永らくの間無意義なる生活を繼續せしを遺憾と致し居り候ひしが再び立ちて小我を犠牲にして社

大正十一、六、三〇

△會誌

會

誌

第十回 例 會

大正十一年二月二十六日開會午前十時、閉會十一時半

會場、山本先生宅、人員九名

一、山本先生ヨリ三月下旬修養團ノ幹事後藤靜香先生來
萩講演セラル件ニツキ、注意セラル

二、後藤先生著歡喜卷一ノ二章ヲ朗讀セラル

三、山本先生ノ過般來萩町會議員ノ行動ニ對シテ、御奮

闘アリシ一端ヲ承ル

第十一回 例 會

大正十一年三月二十一日

此日我自警會ハ兎狩ヲ山田ノ奥ニ行フ、餘寒峻風ノ下獵師數人ト大ニ數丘ヲ踩踐シテ剛健ノ氣ヲ養フ獲物無カリシト雖モ、亦快少シトセズ會スルモノ七名

第十二回 例 會

大正十一年六月十二日午後二時、會場松下村塾

會奉仕に身を致すの時來れると喜び居申し候將來宜しく

御指導の程祈上候 (下略) 大正十一、十、十二

○田万崎よりの通信

宮内 謙吉

自警第二號本日参りました有難く御禮申上ます新らしい學年が來ました入會志願者に付き云々される今日、そして藤井君を高校へ送つた我會は一段の努力を爲すべきものと思ひます此上とも御心配を御願ひし且つ先生の御勇健を祈ります

大正十一、三、三一

○田万崎よりの第二信

先生から二度目の御葉書を載いてから約一ヶ月過ぎましたもう方々から原稿が集つた事でせう私には云々も恥かしい其日其日の過し體で天罰の當らぬのが不思議な位でせう併し心の奥には慾心がウザ〜してあます到頭八月頃に書きなぐつたものをそのまま差し出す事に致しました御採否は御意のままにお願ひ致します、ボストへ落ちた音を聞けば私の氣はずむので御座いますから

大正十一、十、二十一

來會者六名

一、留魂錄ヲ各自輪讀ノ後山本先生ヨリソノ大意ヲ承ル
木原君ノ所感談

第十三回 例 會

大正十一年七月十九日午前十時

會場、山本先生宅、來會者六名

一、當地ノ漢學者原田貞男先生ノ中庸第十四章第二節ノ講義アリタリ

一、歸省中ノ京大法科生廣田氏ノ、學事体育ニ關スル有益ナル話アリタリ

此度新會員三名ヲ得

第十四回 例 會

大正十一年十月八日午后二時

大正十一年十月八日午后二時

前小畠泉流山

一、御在萩中ノ田中大將閣下及ビ林郡長、岩田校長其他

ノ諸賓ト共ニ撮影ヲナス

一、來會者五年岡、鳥居、木原、三年山本、僅小ナリシハ當日明倫館ニ於テ武道大會舉行セラレシ爲ナランカ

第十五回 例 會

大正十一年十一月二十一日午后二時

大正十一年十一月二十一日午后二時

前小畠泉流山

一、御在萩中ノ田中大將閣下及ビ林郡長、岩田校長其他

ノ諸賓ト共ニ撮影ヲナス

一、來會者五年岡、鳥居、木原、三年山本、僅小ナリシハ當日明倫館ニ於テ武道大會舉行セラレシ爲ナランカ

ナズコトナ得

第八條 入會セントスルモノハ會員二名以上ノ紹介ヲ要

フ交換シ、時ニ先輩ノ講話ヲ乞フコト

第六條 遠足會ヲ催シ、雑誌ヲ發行スルコトアルヘシ

第七條 三、四、五學年ヨリ二名宛ノ幹事ヲ互選シ、會務ノ責ニ任セシム、但シ其任期ハ一ヶ年トシ再選ヲ

ナズコトナ得

第五條 本會ハ一學期數回例會ヲ開キ會員へ進ンデ感想

山口縣阿武郡萩町川島

山口縣美禰郡赤郷村

山口縣阿武郡紫福村

山口縣阿武郡椿東村

山口縣阿武郡福川村

山口縣阿武郡萩町川島

山口縣阿武郡萩町河添

山口縣阿武郡萩町南古萩

山口縣阿武郡椿東村平安古

山口縣阿武郡萩町平安古

山口縣阿武郡椿東村

山口縣阿武郡椿東村

山口縣阿武郡椿東村

山口縣阿武郡椿東村

山口縣阿武郡椿東村

○會員名簿
第五條 本會ハ一學期數回例會ヲ開キ會員へ進ンデ感想
第六條 遠足會ヲ催シ、雑誌ヲ發行スルコトアルヘシ
第七條 三、四、五學年ヨリ二名宛ノ幹事ヲ互選シ、會務ノ責ニ任セシム、但シ其任期ハ一ヶ年トシ再選ヲ
ナズコトナ得

山口縣阿武郡萩町南古萩 三 福田 幸雄
山口縣阿武郡椿東村後小畠 三 山本 斎
山口縣阿武郡萩町堀内 三 岩田 貞夫
山口縣阿武郡萩町吳服町 三 藤村 五郎
山口縣阿武郡椿東村 三 山本 浩
山口縣阿武郡萩町土原 三 倉重 達郎
山口縣阿武郡萩町堀内 三 岩田 博藏
山口縣阿武郡萩町土原 三 北川 爲吉
山口縣阿武郡萩町河添 三 石川 修三
山口縣阿武郡萩町江向 三 山本 勉彌
山口縣阿武郡萩町南古萩 三 安藤 紀一
山口縣阿武郡萩町椿屋町 三 原田 貞男
會友 會友 會友 會友 會友 會友

第五條 本會ハ一學期數回例會ヲ開キ會員へ進ンデ感想
第六條 遠足會ヲ催シ、雑誌ヲ發行スルコトアルヘシ
第七條 三、四、五學年ヨリ二名宛ノ幹事ヲ互選シ、會務ノ責ニ任セシム、但シ其任期ハ一ヶ年トシ再選ヲ
ナズコトナ得

山口縣阿武郡萩町南古萩 三 福田 幸雄
山口縣阿武郡椿東村後小畠 三 山本 斎
山口縣阿武郡萩町堀内 三 岩田 貞夫
山口縣阿武郡萩町吳服町 三 藤村 五郎
山口縣阿武郡椿東村 三 山本 浩
山口縣阿武郡萩町土原 三 倉重 達郎
山口縣阿武郡萩町堀内 三 岩田 博藏
山口縣阿武郡萩町土原 三 北川 爲吉
山口縣阿武郡萩町河添 三 石川 修三
山口縣阿武郡萩町江向 三 山本 勉彌
山口縣阿武郡萩町南古萩 三 安藤 紀一
山口縣阿武郡萩町椿屋町 三 原田 貞男
會友 會友 會友 會友 會友 會友

仁保重視君大正十一年九月八日有爲ノ身ヲ以テ、病
チ得長府町ニ於テ死去ス、自警第二號紀念撮影ノ君
ガ小照ハ空シク記念物トシテ殘サル、痛マシキ哉、
君重態ノ報シ、本會ヨリ見舞状ヲ差シ出シタルニ、
當時已ニ白ラ筆ヲトル能ハズ、嚴父ニ對シ本會ノ隆
盛ヲ祈リ、諸兄ニ宣シク御傳ヘナ乞フトノ遺言アリ
タリトノ訃報ニ接ス、本會ヨリ直ニ悔狀ヲ出シタリ

松陰先生幽閉ノ室ヲ存スル舊杉氏邸ニ於テ來會者七名
一、安藤先生ニ御依頼シテ松陰先生ノ七生ノ朗讀並ニ解
釋ヲ承ル
一、吉田松陰傳ヲ輪讀シテ、先生ノ在ソシ佛ヲ思ヒ浮ブ

會員訃報

仁保重視君大正十一年九月八日有爲ノ身ヲ以テ、病

チ得長府町ニ於テ死去ス、自警第二號紀念撮影ノ君

ガ小照ハ空シク記念物トシテ殘サル、痛マシキ哉、

君重態ノ報シ、本會ヨリ見舞状ヲ差シ出シタルニ、

當時已ニ白ラ筆ヲトル能ハズ、嚴父ニ對シ本會ノ隆

盛ヲ祈リ、諸兄ニ宣シク御傳ヘナ乞フトノ遺言アリ

タリトノ訃報ニ接ス、本會ヨリ直ニ悔狀ヲ出シタリ

自警會規約

第一條 精神修養ニ志シ、品性ノ陶冶ニ努ムルコト

第二條 情誼ヲ厚ウシ、親睦ヲ計ルコト

第三條 本會ハ山口縣萩中學校生徒及卒業生ノ有志者ヲ

以テ組織ス

第四條 本會ニ功勞アル先輩ヲ會友トナスコトヲ得

△摘 錄

第一 章

(1) 天高うして日月懸り、地厚うして山河横はる。日月の精、山河の靈、鍾まりて我が心に在り。高き天と、厚き地と、人と對して三ごなる。人無くして夫れ何の天う、人無くして夫れ何の地う。人の心の靈なるや、以て鬼神を動すべし。人の心の妙なるや、以て天地よ參すべし。燐たる彼の月と日と遙かよ我が心を照す。我が心の凝りで動くや、能く日月を貫くべし。峨々たる山、漫々たる河、常に我が心に通ふ。我が心の遠く翔るや、能く山河を包むべし。たゞ六尺の肉身に、限らるゝ我が心ならず。たゞ五十年の生涯よ、盡きぬべき我が心ならず、

(3) よ昏む。力渙び靈昏みて、たゞ六尺の肉身を。天地の間に寄するのみ、哀しからずや、世俗の人。我に守る所なく、我に恃む所なれば。境によりて心うつり、物のためよ心搖ぐ、得るに喜び失ふに泣き、勝ちて驕り敗れて怨む。喜ぶも煩ひを生み、泣くもまた煩ひを生む。驕れば人ご難を構へ、怨むも世と難を作す。現は我が身を勞し、夢にはわが心とたゝかふ。かひ無き今日を送りつゝ、明日の希望に活くるを知らず、悼ましからずや、斯る中よ、五十年の生涯盡く。心の力と心の靈と、我に備はるゝのぞと知らば。之を養ひ磨くべき、道たのづからこゝよ開けむ。天に呼ぶも天は聲なし、地に訴ふるも地は答へず。雲往き雲來る一春秋、花開き花落つ一日暮。天地を心の中求めず、心の平和を天地に求む。たゞ一

(2) 見よ、雲に色あり、花よ香あり、聞け、風に音あり、鳥に聲あり。此の中に生を托したる、我人にこの心あり、至大至剛はこれ心力、至立至妙はこれ心靈、たゞ此の心あるが故よ、我人は至上至尊なり。夫れ眼前の 小天地は、離合聚散常ならず。我ご我が身こそ、ろこを、此の中よのみ限るものは天なる日月の精を見ず、地なる山河の靈と知らず、其の精と靈とを鍾めたる、我が尊さを我と悟らズ。眼にさへぎる影を拂へ、耳に塞がる塵を去れ。その影消ぬ、その塵絶え、心はすみて鏡の如く。湛然として淵の如くば、彼の小天地よ限られし。昨日の我を外よして、至上至尊の我あると知らむ。

第二章

心に力ありといへども、養はざれば日に泥ぶ。心に靈ありといへども、磨かざれば日

(4) 念の惑ひによりて、我から闇に入るを悟らず。みづから養ひ自ら磨けば、我がこの心わが爲に。よく新なる境を作り、よく新なる生を開く。鬼神の力を假るを用ひず、鬼神の力我に在り。雷霆の威を羨む莫れ、雷霆の威も我よ存す。我を苦めしも我が心、我を救ふもまた我が心。これあるが爲に我惱めど、これあるが故に我獨り尊し。

第三章

観よ、明に觀よ、天地はこれ我が家。鳥飛ぶは彼の蒼々たる天、獸走るはこれ曠々たる地。地に草木あり常々榮ぬ、天に星辰あり高く輝く。陰晴は則ち天の節、温涼は則ち地の時。時差はず節渝らず、萬物ごとに生を享く、聽け、靜に聽け、萬有はされ我が友、颺颺たるは風の音か、澎湃たるは水の聲か。澎湃はこれ地の歌、颺颺はこれ天

(5) の樂、生ある者、生なき者、調を合せて之よ和す。春秋代り日暮移るも、斯くて天地は寂莫たらず、我人共よ備はれる、此の萬象に向ひて立つ。尊とからずや我が此の生、樂しからずや我が此の世。樂しさを樂しと知らず、尊きと尊しこ見ず。内なる寶を外にして、人は形ある寶を求む、求むる所いよ／＼多く、失ふ所ますます繁し、自ら糾へる迷ひの繩よ、身を繫ぎまた心を繫ぐ、德無くば堅城に居るも、堅城は身を護るよ足らず、心虛くば錦衣を着くるも、錦衣は身を飾るよ足らず、權勢はたゞ惱みを増し、富貴はたゞ煩ひとなす、斯くて相競ひ相争

ふも、たゞこれ空しき夢ならずや、天地ごともに三となるべき、尊き心を寶として、能く篤く之を養ひ、能く怠らす之を磨けば行ふ業よ力溢れ、出す語よ靈籠り、不朽の

(7) れば、清涼の境忽ち開け、涼風萬斛身をめぐる、彼の沝寒の天地を封じ、冰雪深く山河を鎖せば、日に熱なく月よ影なく、黯然として物みな死す、血は氷りて環り流れす肉は裂けて墮ちなんとす、たゞ我か心一たび凝りて、苦寒何うご叱咤すれば、元氣四體の外に溢れて、陽春の候忽ち現す、心虛なれば體危し、動けば勞し行けば喘ぐ、心凝りて動せざれば、體胖にして氣飢ゑす、千里よ行くも足軽く、萬鈞を荷ふも身は安し、悠々として立ち、怡々として坐す、貴きかな我か心力、

第五章

心はこれ身の王、王よ威ありて國泰し、心を尊び心を養ふ、その徳即ち身に現す、疫病也この人を襲はず、毒蛇もこの人を蟄さず、晝は煩ひ無くして居泰く、夜は夢なく

生命こゝに具す、之をぞ眞の人といふべき

第四章

(6) 心の力一たび凝れば、向ふ所皆靡く、鬼よ
逢ば鬼を服し、魔よあへば魔を降す、彼の
水の漲るや、よく千仞の岡を浸す、たゞ我
が心は動かすして高く怒濤の外に立つ、彼
の火の熾なるや、よく百里の原を燎く、た
ゞ我か心は騒かすして、紅蓮の焰の中よ笑
ふ、猛虎も雲に駕し得す、蛟龍の靈なるも
地に潜み難し、たゞ我か心の向ふ所、敵す
る者無きか故に、能く雲を凌きて高く翔り
よく地を貫きて深く潜む、放てば六合に充
ちぬべく、收むれば則ち密に藏る、彼の炎
帝の火龍を鞭ち、極熱の氣天地を包めば、
金石溶け草樹燃え、江海共にあせ果てゝ、
鳥は翼の力を失ひ、魚は盡く地に轉ぶ、た
ゞ我か心一たび凝りて、炎熱去れよと念す

(9) 我か心は擾されず、集りて我を毀るも、我
か心は激することなし、我を玉樓金殿よ置
くも、我は悠々たり、何をか問はむ、我を
深山窮谷に囚ふるも、我は怡々たり、何を
か痛まむ、身は飢うるも心は飢ゑず、身は
飽くも心へ飽かず、斯の如くなるを得て後
はじめて我獨り尊し。

第六章

の靈。

第七章

(11) 心の靈一たび耀けば、向ふ者皆照さる。宇
宙の廣さも廣しとせず、毛髮の微なるも微
きはず、我を繞れる萬象は、色相もとよ
り無限なり。形も無限、聲もまた無限、香
も無限、味もまた無限、斯く限りるき時
中に、限り無き變化を示せる、萬象の中に
我立てり、されど我が心の靈なる、之を照
して敢て漏さず、或は分ち或は比べ、或は
外より或は内より、同じき中よ異を求め、

(8) して睡り穩なり、出る息よく律に合し、入
る息よく呂にかなふ、精力毛髮の末に溢れ
顔色常よ嬰兒の如し、眼曇らず、足迫らず
青天を戴き、大地を踏む、行けば瑞氣これ
を護る、妖氣いかでか之を犯さむ、語れば
其の聲雲よ徹す、天童耳を傾けて聽かむ、
夫れ心よく物を制すれば、敢て物の爲よ制
せられず、弓を引きて我に向ふも、我靜か
よ之よ對すれば、其の箭虛しく空を射て、
更に我が身に近づかず、戟をこりて我よ追
るも、我徐ろよ之を迎ふれば、刃は我が身
よ加はるとも、絶えて我が血よ染むことな
し、我手をあげて麾けは、霧を開きて鴻雁
來り、嶺を分けて麋鹿聚り、欣々として我
を親しむ、我手を揮つて去れといへば、豺
狼もその尾を垂れ、鷺鳥もその爪を包み、
惶々として我を避く、群りて我を譽むるも

異れる間に同を捉へ、有るによりて無きを推し、来るによりて去るを察し、果てなき微妙の作用に、この萬像を照し盡して、我三寸の胸臆に、斯る無限の相を藏む、六尺の身より宿れども、此の心の翔る所は、海を超ゆ陸を超ゆ、天地の外に出んとす、五十年の生を享くれば、此の心の通ふ所は、幾萬年の往古より、百千劫の後に及ぶ、我ハ古人の面を見ざれど、古人の心に觸れつべし、心と心と相觸るれば、相見て相語るに異らず、我か友は海の外より在れど、友の心によく我に感ず、心と心と相感せられべ、相共に住むと同じからずや、時は古今によりて隔たり、所は東西によりて分たる、斯して此の身は制せらる、ただ此の心は制せられず、心と心と相あふ時、古今もなく東西もなく無限の境をこゝに開く、妙なるかな我か心

(10)

每よ皆精を極む、鍬さりて耕せば、功德の種を地に植ゑ、市に立ちて商へば、人を利しまだ己れを利す、學べば必ずその蘊を究め、説けば必ずその秘を悉す、節奏を合せて歌うたひ、筆を揮ひて詩を成せば、天地萬有を讀じ得て、至妙の靈感を人にとゞむ刀を手よして石に對し、彩を合せて帛よ注げば、天地萬有の神を寫して、寰宇の外より人を誘ふ、戰へば勝ち、攻むれば取り、麾けば人翕然として集る、あゝ斯の如くなるを得て、はじめて我獨り尊し。

第八章

限り無き心の力を知れ、果てなき心の靈を知れ、迷ひの作れる天地の外に、眞の天地のあるを見よ、我よく境を作る時は、絶えで境の爲より制せられず、神の關ける國に生れ、神の後なる君に仕へ、世より雙びなき國

ぬ光を長に放つ、誰かこの力を與へし、力の泉は我より在り、誰かこの光を與へし、求むれは我が心の光、嗚呼天は高く、地は厚し、我より心の靈なるあり、三つのもの永く相照す、美しきかな、偉なる哉。

の光に、我が踏む道は常に照され、貴き親の恩愛よ、我が住む庭はいつも潤ふ、身より享け得たる幸を、あつく我心に保ち、一向よ我依らず、また一向に疎んぜず、悠々として立ち、怡々として居り、平かに思ひ、安らかに動けば、物は皆我に親しくして、人は皆我が友たるべし、獨り在れば我獨り樂む、共にあれば人と共に樂む、家に在れば家榮え、門をめぐりて鳥歌ふ、村より在れば村榮え、山にも丘にも惠風満つ、進みて國事に參すれば、克く百年の計を立て、退きて野に處る時は、風を收め俗を移す、攀々たりその胸宇、昂々たり其の風貌、仰ぎて天に向ふときは、天の神遠く笑ひ、俯いて地より視る時は、地の靈共より之を讀ず、限りある生を享くれば、限りなき力を後にとごむ、限られし地に身を置けど、限られ

(14)

(13)

大正十二年四月廿六日印刷
大正十二年五月五日發行

大正十二年四月廿六日印刷

山 本 醫 院 內

菽園九字訣向第四百二十一

山本醫院

品賣非)

山口縣阿武郡萩町西田町
印 刷 所 株 式 會 社 萩 響 海 館

